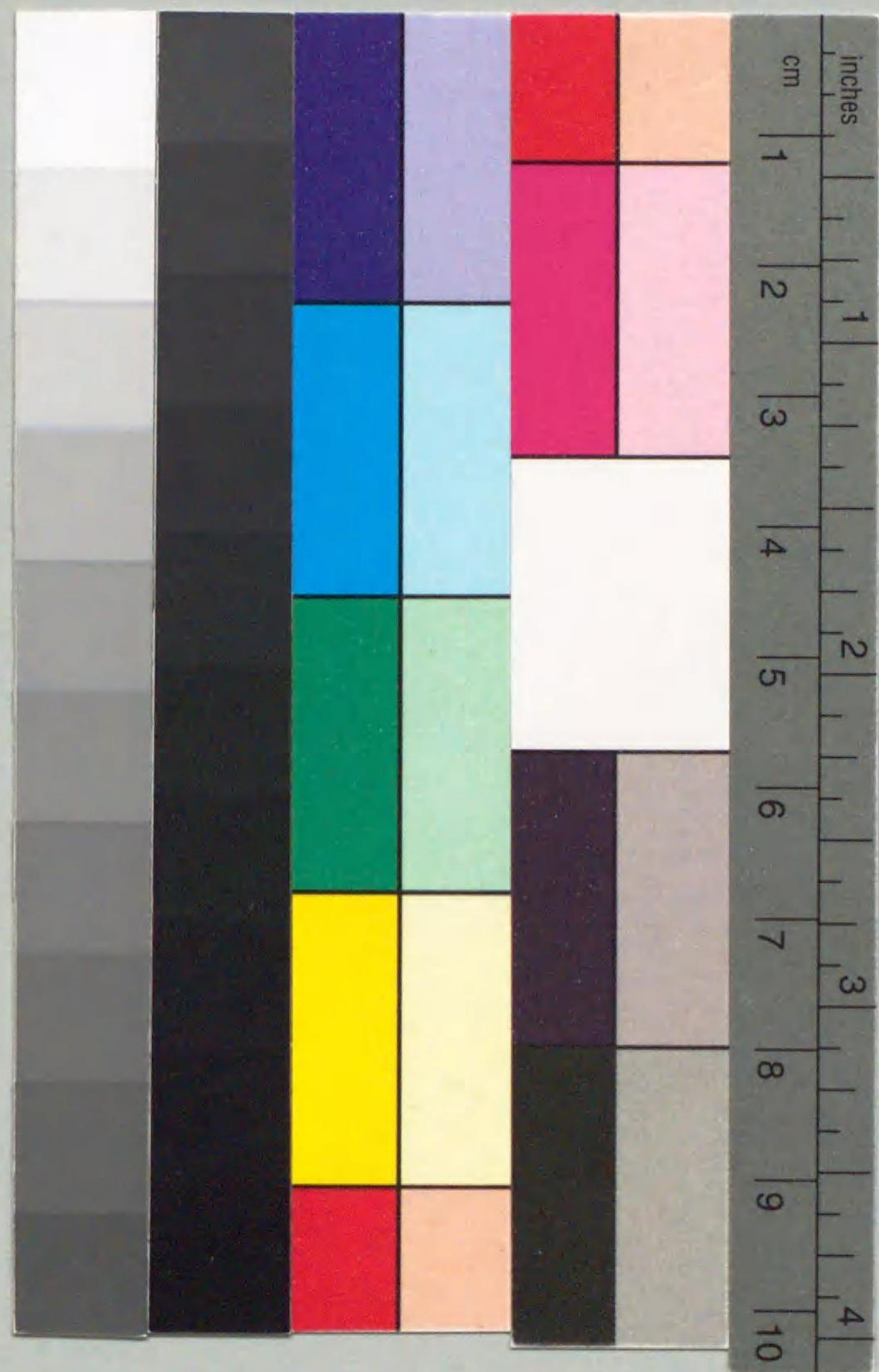


US41

1694



80W35750



呈
麻生君

敬啟

抄 塵 卷

著成能倍安



版 店 書 山 小

抄 塵 卷

著成能倍安



版 店 書 山 小

US41
1694



049.1

80W35750

序

この書に収めた文章は、大たい昭和十五年九月末、私が久しぶりに東京に生
活するやうになつてからのものである。私は去年六月、『自然人間書物』とい
ふ隨筆集を岩波書店から出したが、この書の中にも歸京以後の文章を六篇収録
してある。その六篇中、一高生へ與へた「雜感」と歸京後の生活を敍した「下
落合より、四」との二つだけは、こちらで書いたといふばかりでなく、こちら
に歸らねば書けぬ性質のものだから、この集の中へまとめたくなり、改めて二
度の務をさせたことおはりする。後の文章は本書では「下落合より、一」
になつて居る。その外に歸京以前に書いたものも三四篇あるが、その中「小宮

豊隆の『夏目漱石』を読む』二篇は、どうしたわけか前集に収録を忘れたものであり、「一冊の手張」は十數年も前の昭和五年のものである。併しこの集が、よくもあしくも私の歸京後の生活やその間に考へたこと感じたことを傳へる、といふ全體的特色は、先づ認めてよいと信ずる。私は歸京以來、京城での生活に比べれば大分多忙になり、色々な事で色々な所へも出て行くことが多くなつた。従つてゆつくり文章を書く暇も乏しくなつたわけだけでも、かうして集めて見ると數だけはわりによく書いたものだと思ふ。けれども此等の文章は皆かた頼まれてことわり切れずに書いたのであつて、自ら進んで書いた文章は皆無といつてよい。これは私の場合今までも大抵さうではあつたが、東京生活に交はつてからは、それが一層甚しくなつて來た。そのことの上しあしは今論じないが、私はただ、随分ことはつて居た積りで存外多くの雜文を書いて居たことにむしろ驚くくらゐである。又いよ／＼校了になつて見て、寺田さんの所

謂「釜の下の灰」まで掻き集め過ぎたといふ感じを今更の如く覺えて、いささか慚愧の想ひもある。

この集は隨筆集といふよりはむしろ雜文集であり、論文的なものも相當あるが、此等も亦、この二年東京の巷塵に交はつた生活を記念する爲に、残らず収録することにした。私が教育者の末席に坐した爲に、今までより教育に關するものが多くなり、又校長をして居る爲に、生徒の依頼によつて一高生を相手にしたものを多く書いたのも、自然の勢といふものであらう。

文中「脇寶生に就いて」の或る史實に關しては、訂正したいことがあつたが、校正進行中で十分その意を果さなかつた。たゞ觀世、寶生兩家に關しては、前者はもと結崎ゆひさき、後者は外山とがといひ、起りは後者の方が古かつたが、前者の方に觀阿彌、世阿彌、音阿彌等の名人が室町時代に輩出して、その存在が當時著しく前に著はれたこと、その頃觀世家から寶生家へ養子に行つたことがあり、兄

弟關係が兩家の間に存したことがあるといふ一事を補足して置く。

私はこの本を甥の小山の經營する書店から出した。彼が岩波書店の務めを辭して店を始めてから十年になつた今日、この書を出すのは多少の感慨である。彼の事業もこの頃漸くその緒に就いて來たらしいが、この狂瀾怒濤の現下出版界にあつて、彼が途中難破の厄に逢ふことなく、常に正しく彼岸の標的を目ざして進まんことは、私の切なる願ひである。

昭和十八年二月六日

東京下落合三樓書屋にて

著者

目次

序

1

新文化の基礎……………	三
新國民文化建設の方向……………	二四
家族制度と生活の問題……………	三六
知識人の反省……………	五一
鍊成と學問……………	六〇

2

文教問題雜見……………	七三
-------------	----

初めて協力會議に出席して	一九六
教育者の反省	一九八
教育者の尊重	二〇五
時感	二〇九
對米英戰に臨みて	二二三
ねぢ	二二五
國民素質の向上	二二八
私の發言	二三三
文科の志望者	二三四
支配者	二三五
日本人の話術	二三六

3

新任の挨拶	二三二
-------	-----

雑感	二三六
第五十一回記念祭に臨んで	二四〇
共濟部へ	二四九
同窓會の諸兄へ	二五二
第五十二回記念祭に臨んで	二五九
○ 新入生を迎ふ	二六六
○ 記念祭を迎へて	二七〇
○ 青年と責任感	二七二
青年に臨む態度	二八四
少年の旅行に就いて	二八七
日々の生活	二八九
多忙	二九六

4

小宮豊隆の『夏目漱石』を読む	二〇七
櫻田門・土手・壕	二〇八
虞美人草に就いて	二一〇
讀書に就いて	二一四
『開墾』を通讀して	二一六
協賛生に就いて	二五一
少年時代に讀んだ古典	二七九
一夕支那劇を見て思つたこと	二八七
世阿彌雜感	二九五
『白桃』『曉紅』『寒雲』を一讀して	三〇三
讀過 印象	三〇八

5

この頃の心持	三二五
--------	-----

母のこと	三三二
岩元先生のこと	三三九
思ひ出す師と友と	三四四
土のこと	三五九
眞鍋の思ひ出	三六三
一冊の手帳	三六九

下落合より	三七九
-------	-----

發表年月日一覽表	三九七
----------	-----

1

新文化の基礎

それがよりよくなるか或はよりあしくなるかを、暫く問題としないとしても、世界が變りつつあること、又變らずに居られぬことは、誰しも認めざるを得ない事實である。尤もそれは差向文化的の變革といふよりも多く政治的の變革である。併し文化と政治とは決して離し得べきものでなく、政治が文化を規定し得るが如く文化も亦政治を規定し得るし、兩者の間に存する交互作用を無視することは決して出来ない。併し今日の時勢に就いていふならば、文化が政治を規定するよりも寧ろ政治が文化を規定するといふ傾向を、明かに認め得られるし、政治が文化や思想を支配するといふのが、現代の著しい特質だと斷言することが出来る。ヒットラーの如きも、『我が闘争』の中に明かにそれをいつて居る。即ち彼は文化の問題は

先づ政治の問題を處理して後になさるべきを説いてゐる。我國に於ける現在の傾向を見ても、この事實は容易に肯定せられる。けれども更に他面から考へれば、文化や思想に對する政治の支配そのものが、既に一つの文化的思想的傾向を示すものである上に、かういふ傾向を規定するものとして、既に文化的思想的なる契機を存することを見遁し得ないのである。マルキシズムが世界に於ける一つの政治的勢力として實現されて以來、上の事實は殊に著明になつて來た。即ち政治にイデオロギ―——思想的根據——が要求せられる、少なくとも標榜せられることは、世界の流行であつて我國も亦それに洩れない。だから政治が思想や文化を支配するといへると共に、その政治は又或る強い傾向を持つた思想や文化によつて支配せられることが、甚しいともいへるのであつて、かういふ見方からすれば、逆に、現代は思想若しくは文化の政治を支配する時代だといつてもよいのである。

而も尙且現代を以て政治の文化や思想を支配する時代、現代の文化や思想を以て政治によつて支配された文化や思想と呼び得る所以は、その思想や文化が現實の政治的必要によつて規定せられる程度が極めて大きいといふことにある。さうしてその政治的必要といふことも、結局は現實の國民の生活又は生死、國家の危急存亡に干涉することによつて、一層その痛切

の度を強化するのである。思想、文化、政治がかかる切實な生活的要求に根ざすといふことは、有無をいはず必然性から來るものであり、其自身として必しもわるいことではない。否生活上の切實と重大とが、その文化や思想を切實な嚴肅なものとすることは、文化や思想にとつても喜ぶべきことでさへある。ただ多くの場合かかる生活上の切實が、往々にして國民の上のしかかる重壓となり、その重壓に堪へないで國民の態勢が崩れる恐れがあること、かくして國民が往々癡癡的に興奮して、事態を十分に正しく認識するに堪へず、そこに威嚇や煽動や流言や蜚語が行はれて、その客觀的事態の緊切に即應する態度が精確に取られず、その標榜せられる思想や文化の方向が、本當に國民を内から動かすことの出來ないものとなり、徒らに國民をあせらしおびえさせるものとなつて、思想としても文化としても、わるい意味に於いて觀念的抽象的なものとなつて、内面的な強さと弾力性と發展性とを有するに至らないといふことである。現代の政治的傾向が現代の文化や思想を規定して居ることは、現に否定すべからざる事實として、我々がその正しい認識を志すべき所のものである。新しい文化がこの線に沿つて發展すべきことも亦、殆ど必然的だといはねばならない。そこで新文化に對する我々の基礎的態度も亦、この認識を絶えず是正してこれを深め、これをその必然

的な本質に於いて把握しつつ、よくこの客觀的事態の發展に主體的に即應して行くことにより、更にその中から新たに高遠にして而も切實な指導的理念を掲げ來ることにある。かくいふのは、國家や國民の置かれてゐる客觀的状況を正しく認識し、この認識に基づいた標的や理想を掲げ、この状況に適切なる處置を下すことの決して容易でないこと、換言すれば與へられたる客觀的状況に對して、それを命づけそれを内面化する主體的态度を取ることが極めて困難にして、そこに様々な重大條件が必要とせられることを、聲を大にして警告せんが爲である。

二

一たい現代に起らんとする新たな文化とは如何なるものであるか。更にそれを規定し又はそれに規定せられる政治の新體制なるものは何であらうか。思ふに資本主義的な經濟的政治的組織が、國民の中に於ける貧富の差を隔絶せしめ、勞資の兩階級を相對立せしめた結果は、國家的國民的統一を分裂せしめるといふ勢を馴致した。そこへ持つて行つて、專制主義の大帝國であり、國民の權益の最も多く蹂躪せられて居た帝政ロシアに革命が起り、労働者の天

下取りが成功して、ソヴェート・ロシアなるものが出來た。さうしてこの國家が元來、萬國の労働者を結合して労働者の世界的統治を志すといふ、國際的性格を標榜するものだとしても、その実績から見れば、要するに労働國家の名の下に、所謂資本主義國家なるものを崩壊し分裂せしめんとする、一種の帝國主義的な強力な軍國に化して來たのであつた。世界のあらゆる國家は多少ともこの脅威を感じて、國家的國民的統一の上に不安を感じないものはない。我國に於いても一時共產主義的革命的實現を信じたものさへあつた。この不安と脅威とに對して、所謂持てる國は或る程度まで労働者を優遇することによつて、國內に於ける矛盾的對立を緩和しようとした。アメリカ、イギリス、フランスなどの取つた方法は、その程度は異なるにしても皆それであつた。それは大體に於いて消極的であつたが、その結果墮落した自由主義ともいふべき利己主義の横行を拘束することが出來ず、労働者の放恣と資本家の私利私欲とによつて國家の大計を忽せにした結果、崩壞に瀕して居るフランスの如きがある。これに對してドイツ、イタリアは、民族的統一の強化によつて、この國家的分裂を積極的に防止しようとした。さうして此等の國が所謂持たざる國であり、英佛の勢力によつて從來常にその生存と發展とを沮まれたといふ事情は、偶々不世出の傑れた獨裁者を得たといふ事情

にも助けられて、この國民的統一の運動を支持し強化するといふことになつた。四世紀の長きに亘つてその盛大を維持したイギリスは、今やこの新興の勢力に對しても、實に強靱にして執拗な底力を發揮しては居るが、それが守勢の位置にあたることだけは否定せられな
5。

フランスは利己主義的意味に於いて個人化された社會主義の爲に崩壊し、ドイツやイタリヤは大體に於いて社會主義的政策を國家化し民族化することによつて、その統一を強化せんとして居る。何れにしても今日の緊張した國際關係が、殊にその交戦状態に於いて、民族的國家的統一と國民總力の統制とを要求して居ることは事實であり、これは好むと好まざるとに拘らず、實にのつびきならぬ必要であつて、所謂民主主義國家なるものも、その點に於いて益々全體主義的國家に倣はざるを得なくなつて來た事實は、日々の新聞紙の我々に語る所である。

三

そこで所謂全體主義國家なるものが、民族的統一を中心にして、國民と國家との統一強化

を實現せんとする傾向は、今や世界の大局を成して居るといつてよい。民族による統一は、血による統一といふ意味に於いて最も自然的な統一である。所謂血は水よりも濃いといふわけである。併し國民的な國家的統一は法律的若しくは政治的統一であり、若しくはそれ以上の意味に於いて精神的統一であるからして、單に自然的なる血族的關係のみによつては維持することが出来ない。その上民族といふことを人種の意味に解すれば、同一人種から出來て居る國家は殆どないといつてよく、現に民族主義の本家のやうなドイツに於いても、その人種は少くとも五つを數へるとは、ローゼンベルクも斷言せる所である。ハンガリヤの如きに至つては一層甚しく、かつてブダペストを訪れた時、その大學の地理學者のチョーノキ教授は、小學校へいつて見ても、ドイツでは頭髮が大體ブロンドだが、ハンガリヤでは實に色色な頭髮の子供の居ることを語つた。だから國民の血の純粹といふことも、或る程度の混血を許さない程絶對的なものではあり得ない。そこでシュパンの如く、結局同一文化を有することを以て民族の規定とするやうな見方も生ずるわけである。だから大體一定の地域に住んで、有力な人種を中心として、相當の年月を経て無理の少ない諸人種の混和が行はれ、それが共同の歴史によつて共通の特色ある文化を形成するに及んで、大體民族といふ概念が作ら

れるのであつて、常識的に考へられる程それは嚴密にして明確な概念ではないのである。ただ血族的な自然的關係と歴史的文化的關係との具體的融合によつて、自然的な要素が精神化され理想化されると共に、精神的なものが自然化されて傳統となることによつて、民族的統一は最も自然にして強固な統一たるを得るのである。さうしてこの兩者融合の跡は、その民族の有する神話、傳説、歴史、傳統等に於いてこれを認め得るのである。

民族による國家的統一若しくは國際的結合は、現代の世界に於ける一つの著しい現象だといつてよい。一種の全體主義國たるソヴェート・ロシヤの國家的統一は、これを民族的統一といひ得ないけれども、新興の二大國家なるドイツ、イタリアはその代表的なるものであり、フランスは爛熟した民族的文化を誇りつつも國家的統一に於いてその脆弱を示したが、イギリスの抵抗の強靱には、アングロサクソンの民族的な誇りが根柢に存するし、アメリカは最も多く持てる若き國として、その恵まれたる位置によつて強固なる國民的統一を閑却しがちであつたにしても、現在の國際狀勢は強くその民族的意識を刺激して止まざるものがある。アメリカやカナダがイギリスに助力を惜まざらんとするのも、その根柢に強い同民族的感情がないとはいへない。尤もその反對の事實の存することも、複雑な歴史的現象としては止むを得ない。

得ない。イタリアとフランスとは單にラテン民族たるの故を以てしては、相協調することが出来なかつた。ヒットラーもローゼンベルクも共に、ヨーロッパの否世界の最も優越なる民族だといつて居る同じゲルマン民族に屬して居ても、ドイツはスウェーデンを壓迫し、ノルウェイやデンマーク、オランダを攻略し、イギリスを不倶戴天の敵とすることをとどめ得なかつた。併しこの事實は又、近き過去に於いてゲルマン民族提携の希望の存したことを抹殺し了るものではない。日獨伊が攻守同盟を結んでも、日本と彼等とが親近な民族的關係を有しないといふ一事は、日本國民の頭の中に止めて置く必要があらう。

民族的統一は或る程度まで與へられた統一である。そこに強みが存する。併しそれが始めから與へられた統一でなくして、過去に於いて闘ひ取られた統一であることは、その國の歴史を讀む者の容易に覗ひ得る所である。それに又新しい情勢は、常に民族の分化又は分裂、擴大又は發展を生むからして、これに應じて又新たな統一が課せられることになる。かくして自然的本能的な民族的統一は長く維持せられることが出来ず、民族的自覺によつて常に新たな理想が掲げられなければならない。かういふ意味で民族精神なるものは、その民族の故郷であるが、而も常に求められる故郷であつて、居ながら落ち着かれたる故郷ではない

といふことになる。この民族的理想なるものは、深く民族の自然に根ざすと共に、民族の歴史的認識と歴史的自覺とによつて生み出されたものでなければならぬ。さうでないとその輕易な理想化が單なるショウヴィニズムとなり、それが民族の現實や歴史にじっくり合はない抽象的なもしくは痙攣的なものとなり、徒らに呼號のみが喧しくて一向國民の力とも養ひともならぬものになるであらう。

この民族的自覺を深め強める爲には、民族の文化と歴史とがしつかりと認識せられなければならぬ。歴史が現在の立場から認識せられるのは當然のことであるが、かかる認識が歴史の客觀的科學的認識を没却するといふことによつて遂げられると思ふならば、それは非常な間違といはねばならない。現代の日本に就いていふならば、日本の文化や歴史に對する學問的認識も不足であるし、それに基づいた國民の一般的教養も亦極めて不足である。民族的統一を根柢あらしめる爲には、さしむきこの缺陷が補はれねばならない。これは學者の奮發にも待たねばならないが、また文化政策の宜しきを得るにあらざれば、これを期することは困難である。

民族の擴大發展に伴つて、民族的統一のうへに又一つの困難なる課題が生ずる。民族の統

一を強固にする爲に民族の純粹を保たんとし、夾雜せる異分子を排斥せんとする範圍に於いては、その善惡得失は暫く問題外として、民族主義なるものも徹底的たり得る。併し民族がその生存の必要によつて又は支配欲の爲に、他の民族を征服した時、それは民族の純一といふ見地のみからすれば、寧ろその統一を害するものである。これに對する態度としては、中心民族の文化や利害を根本として新附の民族に強い拘束を加へるを厭はないか、或はこれを同化することによつて新たな民族的統一を建設せんとするかである。効果を眼前に擧げるといふ點からすれば、前者が勝さつて居るかも知れない。併し例へば日本が朝鮮併合以來取れる方針は、少なくともその標榜する所より見て後者の難きを取つて居る。この方針は最も正しい方針であり、單なる標榜に止まらず、これを或る程度まで實現し來つたといふ事も亦否定出来ない。ただ過去に於ける日本國民は、島國に離れ住んで、異民族との融合も亦極めて徐々に、概していへば自然に遂げられて來た。大陸に乗り出して新附の民族に對して恒久的な政治的施設を試みるといふ經驗は、日本國民にとつて新たなものである。日本人は正しく困難な道を取りつつ、十分にその困難を自覺せずして徒らに功をあせらうとする。ここは日本にとつての深憂が存するのである。老大にして強靱な支那國民を相手にするに至つて

は、その困難、その困難を凌ぐ努力と忍耐との必要に於いて、そこに又容易ならざるものがあることを覺悟せねばなるまい。

それと同時に我々の考へねばならぬことは、民族的又は國家的といふことと人類的或は國際的といふこととの關係である。我々が國民國家の歴史と民族的特色とを自覺的に尊重するのは、結局は我々の生活を地についた眞實のものたらしめんが爲である。あらゆる眞の藝術品が個性的であるが如く、我々の文化や生活が民族的（單に人類的といふ抽象的なものでなく）であるのは、我々が生きた文化、眞實の生活をして居ることの結果、といふよりも寧ろその表現である。民族的特色のない人類的なものは抽象的であるけれども、他方民族を通じて廣く世界と人類とに訴へるものでなければ、その民族の行動も文化も世界史的意義のない獨りよがりになつてしまふ。實際偉大なる民族、殊にその天才は、最も民族的であると同時に、否民族的であることによつて、最も多く世界的でも人類的でもあるのである。民族が強調せられることによつて、動もすればこの餘りにも自明な一面が閉却せられることを思ひ、敢てこの蛇足を加へるのである。

このことに關聯して一言すべきは、外國文化に對する態度である。世界の産業的状態が、

一面にフィヒテのいつた鎖國的商業國家の態勢を形造つたことは事實であるが、併しそれに即應して鎖國的文化態勢を取るべしとの意見には、斷じて反對である。從來主として西洋から來た自然科学及び文化科學を研究するに急にして、自國に就いて知ることのなかつたのが、學問上文化上に於ける我々の大缺陷であつたことはこれを認める。併し原理的にいつても、自己を知ることと他を知ることとは相離すことが出來ない。我々は自卑自屈と共に自慢自負を排斥しなければならぬ。現代の我國に於いて輕率なる鎖國的外國文化排斥の行はれることは、自に對する認識のまだ淺いことを示すものであつて、我國文化の認識と自覺との深まるにつれて、外國文化の認識と體得との不足なることも亦、認識せずには居られぬであらう。現に自然科学的方面にも文化科學的方面にも、西洋文化の攝取はいつまでも必要とせられるのであり、又西洋の學問文化に對する認識の程度も亦、決して未だ満足すべきものではない。將來の日本は努めて狹陋の弊を避け、自己陶醉を排し、廣濶にして謙虛なる心持を以て、明治天皇の五ヶ條の御誓文の中にある如く、廣く智識を世界に求めると共に、又これを深めてゆかねばならない。

少しく今日の事態を靜觀すれば、今日の國際的逼迫が動もすれば鎖國的形勢を生まんとす

ることも、實に國家と國家とが孤立の位置を保つことが出來ず、餘りにもその生存上利害上の交渉と關心とが深刻だといふ反面を示すものに外ならない、現に飛行機による空襲の慘害の如きは、國民をして益々四隣の國々の存在を一刻も忘却するを得ざらしめんとする。外見的鎖國の状態も決してこの國際的關係の頻繁と深化とを防ぐわけには行かず、機械的文明によつて世界が比隣——而も仲のわるい比隣——に成つた結果は、各國民の生活や文化の相互の交流や反撥や衝動や反應をむしろ激化して居るのであつて、宣傳と間諜との行動の如きも亦、これを示すものに外ならない。だからこの國家的對立の外貌に眼を眩まされて、外國から知識を求め、外國の動向と文化とを認識することを怠つたならば、その國家は恐らく直ちに競争場裡に於ける落伍者に墮してしまふであらう。殊に我國の如き、主としては西洋科學の坦懷なる採用によつて、アジアに覇を唱ふるを得たものの、自然科學に於いても文化科學に於いても、その進歩と充實との點に於いて未だ不満足を示して居る現狀に於いて、一層この感を深うするのである。現下の逼迫せる國情に於いて、現實の爲に自然科學殊にその應用方面の振興が、急に聲を大にして主張せられて居るが、併し基礎的方面を閑却しつつ、短日月を期して發明を命令したり、偶然的末梢的な思ひつきばかりを待つのみでは、この眼

前の目的をさへも達することは出來ないであらう。日本自身に對する認識、東洋思想や東洋文化に對する自覺は、頻りに高唱せられるけれども、その根本をなすところの學的認識及び普及化が、この高唱に追隨することが出來ず、而もこれに對する眞摯なる對策は未だ十分に講ぜられて居ず、徒らに鎖國的西洋排斥の言説を聞くのみである。私は今日に於ける文化科學の不振とこれに對する無關心とが、必ず深い悔を後日に貽す日あらんことを恐れるのである。

外國語の排斥及び外國語教育の廢止又は減少に關する論議に至つても、そのままこれを肯定し得ないものが數々ある。上にいつた所によつて、他を知るの必要が今日に於いて一層切實を示して居り、それが友邦は固より敵意を有する國に對して一層甚しきものがある。大陸に發展する爲には支那語を始め東洋諸語の研究と實修との必要なるが如く、英・米・獨・佛・伊等の、文化に於いて我に一日二日の長ある國々の詞は、以前よりむしろ多く學修せられる必要がある。ただ日本は在來、東海に孤立した島國として、現實的に外國語の必要を感じることの少なかつた爲に、從來の外國語教育が重點を逸して實效を擧げることの少なかつた弊は、十分にこれを認めて改革すべきこと勿論である。

個人の自恣を拘束して全國民を強き統制の下に置くといふことは、全體主義國家としての先進なるドイツ、イタリアの夙に實行せる所であつて、所謂民主主義國家も亦これに倣はざるを得なくなつた所のものである。我國も四年の戦役の結果、愈々統制の切要を痛感して頻りにこれを國民に課しつつあることは、天下周知の事實である。

現在の我が國情下にあつて、よき統制が強く行はれることは、國民全體の希望する處であらう。さうしてこの統制なるものが、單に國民の經濟生活や政治生活を規定するのみならず、又文化生活をも多かれ少なかれ規定することは、政治が文化を支配する現下の傾向から見ても、多分の必然性をそこに認めなければならぬ。この統制は固より現實の難局處理が要求した所のものであるが、併しそれは又一つの必然的な歴史的過程であつて、我々がこれを回避することの出來ぬのは勿論であり、又この段階を頼破りて通るのでは、意義ある文化的の歩みを進めるわけには行かない。

この統制といふことは、在來の政治的、經濟的、更には文化的機構が、その惰性的、自然

的狀態に任せて居たのでは、今日の現實の狀況に適應し、その局面を打開することが出來ないとの認識に基づいて、それを一つの中心理想によつて規制せんとするにあらう。尤もその理想なるものが、深刻なる現實の認識から生れたものであるべきは勿論である。統制が強い中心による一元化を必要とするのは、全體をしてよく全體たらしめんが爲である。さうしてそれは全體を構成せるあらゆる要素をして、全體の一員としてよく全體の趣旨に即應する活動をなさしめることを本義とする。この全體的活動を強力にして、その構成員の力をよく全體に鍾め、その全體にとつて最も緊要にして本質的なる活動に参加せしめるといふことは、平時と非常時とを通じて、國民や國家にとつて大切なことであるが、非常時は、殊に現下當面の必要喫緊事に對して、重點的にこの全體的活動を向けるといふ必要に迫られる。そこに平時と自ら違つた趣が生じて來ざるを得ない。併し統制といふことの變らぬ意義は、全體の構成要素をして各々その所を得せしめることによつて、以て全體的活動に出來るだけ多く深く参加せしめ、以て全體的活動を旺盛にするに存するのである。

この統制は固より生ぬるいものであつてはならないが、同時にそれは出來るだけ包容的なものでなくてはならない。大御心を奉戴してこれを翼賛し奉る大業は、一億臣民を悉くこれ

に参加せしめる底のものでなくてはならない。統制は一つの鮮かな標的と理想とを掲げて、これに従はぬものを排斥することも、強い實踐の必要上止むを得ないけれども、これはこの大業の中心にある人物の如何、包容力の程度、その理想の検討の深さ、その態度の私曲か公明かによつては、却て個人的主觀的な狹陋な態度を以て全體を律しようとする事になり、それが出来るだけ忠義の國民を包容する運動にならずして、徒らに他人を不忠呼ばはりして忠義の國民の數を減少せしめ、彼等の忠義心を沮喪せしめるものとなる恐れがある。

統制は國民個々の強い性格や傑れた個性を破壊することを目的とせず、又彼等の道を狭い一筋の道とすることではなく、各々その所にあつて、わけ登る麓の道は違つても、同じ高嶺の月を仰がしめるにあるのである。個性の相違、個性の尊重が國民を争はしめるのではなく、國民を相争ひ相反かしめるものは、主として彼等の私の權勢欲、利益欲、安全欲であり、かの下剋上の弊風の如きも主としてここから來るのである。さうして此等の欲望は人間に通ぜる本能的な、非個人的な自然性だといつてよい。現代の我國に於いて行はれる誤解の最も深いものは、ヒットラーやムツソリーの獨裁を見て、虎をまねた猫に及ばぬものも、尙よく獨裁者たる資格があるやうに考へることである。自己の性格、識見、勇氣、無私の果してど

の程度のものであるかを考へずに、制度を作つて命令さへすれば、直ちにそれが絶對性を有するやうに考へる弊である。統制の中心となる人物に困難なる資格が要求せられるのみならず、國民の個々にも自覺的な強い性格がなければ、さうしてその統制に自發的に参加する氣持がなければ、その統制は果して國民の全體的な生命を活潑に發動せしめるに堪へるであらうか。英米依存が獨伊依存に代るだけならば、それは外交の革新といふわけにはゆかない。所謂自主的外交なるものが果して奴隸的な國民によつて行はれるであらうか。自國の利害と正義とを根柢として爲される外交は、強固にして自覺的な國民を地盤としてこそ、初めて遂げられるのではないか。現代日本國民の缺陷は、國家全體の利害と休戚との前に私利と私權とを殺し得ざるにあるといはれたが、それは要するに國民に強い性格に基づく、自覺的な全體への、心構への足りぬ所から來て居るのでないか。

統制は國民の力の強き統一であると共に、國民をその全體活動に参加せしめることによつて、等しく生きがひを感じしめ、普く國民としての誇りを感じしめるものでなければならぬ。ムツソリーやヒットラーの全體主義國が、デモクラシーの實は却て我々の國にあると傲語するのが、どの程度まで眞實であるかの吟味は暫く措くとしても、彼等の志す所はそこ

にあるのであらう。近衛公は國民の總てに最高の名譽と最低の生活を保證するといつた。私は公が生命にかけてこの保證を實現せんことを熱望するに堪へない。デモクラシーは頻に排撃せられるけれども、デモクラシーも社會主義も揚棄せられたといふ條件の下に、その長所を取つて差支ないのではないか。ただこの揚棄を経ないものが、我が國體と國情とに合致せざることは固よりである。私は論者のいふ日本文化の包容性をそこにも認めんとするものである。

統制は國民の力を鍾めようとするものであり、徒らに朽ちゆく生命をなくし、野に遺賢なからしめる趣旨の下にある。統制が個人の放肆や享樂を拘束することの當然を認めても、それが自發的生命の壅塞と抑壓とになつてしまつては、抑々統制によつて以て爲される所以の本義を没却するものである。文化的の統制に至つては、殊に政治と思想との外面的に密接な關係を有する現狀に於いて、思想を解せざるものが思想を云爲し、歴史を知らざるものが、山王の御輿をかつぐ叡山の山法師の如く、一知半解にして過急な普遍化によつて輕易に歴史を理想化し、敢て人を脅かさうとする傾向の跋扈するのを見て、その大膽と共に慎重を希望せざるを得ない。これについては民族を論じた時、その一端に觸れたから、その細説につい

ては他日を期したい。

附記

この論題に於いて一文を『理想』の記者から求められたのは、たしか六月のことであつた。締切

のゆつくりして居るのを頼んで、稿を怠つて居る中に、私の境遇が變つて新たなる職に就いた爲、

この二ヶ月ばかり竟に執筆の時間と心持とを與へられなかつた。違約の罪を免れんが爲に、この

四五日忙中の暇を偷んでわづかにこの稿を書きなぐつた。内容の蕪雜がその論題の堂々たるに似

ざるを許して頂きたい。(昭和十五年十月九日朝二時)

新國民文化建設の方向

新體制と聞かれても私は新體制の創設者でないから、新體制のイデオロギ―を提供するといふやうな心持はない。又、新文化の創設といつても、今まで日本の執つてゐた文化建設の方向といふものは、明治初年五箇條の御誓文の中の

一、廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ 一、上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ 一、官武一途庶民ニ至ルマテ各ソノ志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス 一、舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ 一、智識ヲ世界ニ求メ大イニ皇基ヲ振起スヘシ

の御詞に盡きて居ると信ずる。この精神を正しく把握して進む外に、恐らく新體制も新文化もあるまい。併し當時、西洋文化が世界を支配して、世界的文化といふ實力をかなりの程度まで發揮してゐたし、日本に於いても、さういふ關係から西洋文化を盛んに取り入れるとい

ふことが、日本の事實上原則上の方針であつて、殊に國家を維持する現實の必要上、軍備であるとか、産業であるとか、政治であるとか、法律であるとか、さういふものの組織には、一も二もなく西洋を取り入れるといふやうになつて來た。福澤諭吉といふやうな人はかういふ文化的傾向を代表する主要な指導者であつた。

かくして西洋文化に幻惑せられて、一も二もなくそれを取り入れる、盲目的に取り入れる。何がよいとか何が悪いとかの選擇をする餘裕がなく、西洋即ち舶來のものは何でも上等とせられる勢であつた。その上初めは主として目に見えた外形的なものから取り入れるといふことになる。明治十年代の末から二十年代にかけては、歐化主義といふか、西洋崇拜は随分極端なものであつた。それから明治初年に於る西洋の個人主義、自由主義の取り入れかたといふものは非常に大膽であり、國體を無視した革命論も随分行はれたのであつた。併し考へて見れば、如何なる時代にも、その長所と共に弊害のないものではなく、利益を收めると同時に害を貽さないものはない。そこで大局から見れば、西洋文化に非常に感心してそれを盲目的に取り入れたといふことも、大部分は當時の國情が必然的に要求した所に基づくのであつて、かかる場合分別臭く批評的な態度を取つたりして居ては、日本はかく急速に起ち上ることは

出来なかつたであらう。

けれども外形的な西洋文化の取り入れに満足せずして、その精神的文化を取り入れようとする要求はやがて起つて來ざるを得ない。それは明治二十年代の初め頃から、際立つてキリスト教が我が宗教界思想界に頭をもたげて來、その時分植村正久とか内村鑑三とかいふ、熱烈な代表的なクリスチャンによつて、この西洋文化の精神的方面の重大な根柢をなせる宗教並びに宗教的情操や思想が、文壇や思想界に多大の影響を與へた。かやうに先づ西洋の外形的な文化を取り入れた後、それに満足しないで精神的な方面を取り入れたといふことも、自然當然の勢と觀ていいのである。

その後、日清、日露の戦役を経て我國の國勢が段々盛んになつて來た。かくして政治的にも産業的にも軍事的にも、色々の點に於いて國力が伸長して來ると同時に、精神的方面の要求も段々深まつて來た。それを示す一つの著しい事例として、日露戦役は、我國が世界的勢力として登場する一大動力であつたと共に、その前後の數年は、日本の青年が内面的世界に向ひ、その爲に深い煩悶を體驗し、その解決を求めたといふ意味に於いても、劃期的な時代であつた。併しこの内面的な傾向は大體は個人的主觀的態度を取るものとなり、さうしてさ

ういふ内面的要求を持つた知識階級は、社會的、政治的といふやうな方面に非常に冷淡になつて、ひたすら自分の内なる世界を求めるといふ風になつた。併しその中には一種の精神的自慰といふ傾向があり、それから内面的と稱して自分の瑣末な小我到に拘泥したり、自己陶醉に安んずるといふ弊害がなかつた譯ではない。かういふ風にして、知識人、文化人は社會生活、それから國家生活といふものと動もすれば遊離しようとするやうになつて來た。國運が大に興らうとし、社會の諸々の活動が非常に旺盛にならうとする時、かういふ現象の見られたのも或る意味では當然のことである。

併し、第一次歐洲戦役の結果に依つて、日本が經濟的にも非常に膨脹すると同時に、資本主義的な組織も擴大し強化されて、社會狀勢も段々西洋に接近して來るやうになり、同時に資本主義の弊害も自覺せられるやうになつた。その上歐洲戦役の末期からソヴェート・ロシアを中心にして共產主義運動が非常な勢で擡頭し來り、それが時代の貧富の懸隔であるとか、資本の集中であるとかいふやうに、誰人も否定することが出來ない現象に即したのと、又イデオロギーが徹底して合理的なものと思はれたといふ處から、非常に青年を惹きつけて、今まで内面的主觀的に走つてゐた青年、或は思想家が、俄然として社會運動に關心を持つに至

つた。殊にマルクス主義が文化を以て経済的活動を下層建築とする上層建築と見、一切の人間活動の基礎を経済的活動に於いて見出さうとする唯物論的世界観は、一世を風靡するの概があり、そこに日本の特殊なる国情であるとか、或はさういふ破壊が果して眞に人類の幸福を來たすか、といふやうなことはよく考へられないで、青年は一種の宗教に向ふやうな氣持でマルキシズムに赴くやうになつて來た。

マルクス主義の影響といふものは非常に世界を動かした。日本ばかりでなしに歐洲の諸國をも大した勢で動かした。さうしてイギリスとかフランスとかいふ代表的な資本主義國、それからアメリカといふやうな持てる國、さういふものにもマルキシズムの影響は著しく、その結果は労働者と資本家との對立を激成するが故に、國家とか民族といふものの結末が分裂を來す勢を免れなかつた。そこでさういふ國々は主として社會政策的方法を執り、労働者を出來るだけ優遇することに依つて、その對立若しくは分裂を緩和しようとする方法を執つた。これは概して消極的な態度である。それに對してイタリアやドイツは民族主義、民族に依る國民の統一といふことを以てこれに對抗した。無論對抗したといつても、社會主義の主張する民衆殊に労働者の幸福の如き主張は、隨分の程度まで取り入れざるを得なかつたのである。

さういふものは揚棄された契機として取り入れたが、併し、民族の歴史、民族の文化、更に遡つては民族の神話、さういふものを中心にして、國民的、民族的統一を圖ることに依つて、積極的に社會主義による國家の分裂に對抗しようとした。

ドイツはヨーロッパ戰役後には、社會主義の影響を受けて一時瓦解しようとする程になつたが、それを持ち直して今日のやうな情勢になつた。それからイタリアでは、ムッソリーニは初め社會主義者であつたが、民族主義者に轉向して來たのである。フランスに於いてはさういふソーシャリズムといふものが、フランスの自由主義の傳統と結びついて、悪い意味に於ける個人主義となり、労働者の放恣が收拾すべからざるやうになつて、あれだけ優れた文化を持つてゐながら今日の狀態になつた。アメリカは、隨分社會主義の影響を蒙つたけれども、なにしろああいふ若い國であるし、それから持てる國であるから、せち辛さがヨーロッパに較べて少ないといふやうな處からして、民族的といふ點からいへば、隨分雑多の民族を包容してそれに困つてもゐながら、新興の強大國として、今日に於いては世界の富を集めて世界を支配しようといふ勢になつてゐる。イギリスは、マルクスも認めた如き資本主義の代表國であるが、併しその強靱なる國民性、それから民族性——民族主義を標榜こそしてゐな

いが——たるアングロサクソンの誇を強く持つて、今日に於いても強靱なる抵抗力を示してゐるといふ状態である。

翻つて日本の状態を見ると、日本は決して純粹な一つの人種から成立してゐる國ではなく、色々な人種が混合してゐるが、併しヨーロッパの境を直接する諸國と違ひ、長い間島國として他から離れた他に亂されることの少ない生活をして來たといふ關係から、大和民族を中心として相異なる諸人種の血も混合して、それが限定された地域に於いて長い歴史、長い文化によつて比較的順調に統一されたのである。かういふことから民族的統一は、獲得したものとより寧ろより多く與へられたものとして、從來これを持つて來た。處がそれが俄然としてヨーロッパの列強に相對するといふことになつたのであるけれども、何しろ遠く海を距ててゐるといふことであるし、その民族的交渉は今までは割合に薄かつた。さういふ處から、民族が渾然と統一を保つたといふ點で恵まれて居たが、實感的に民族的意識を激發せられる機會は、これまで割に乏しかつた。

一體國民的といふことは、國際的といふことと離すことは出來ないのであつて、現在の實際情勢は國民的に相對立してゐるやうであるが、國民的對立といふことは、つまり國際關係

があまりに激しい、それから國際的關係の影響があまりに大きい、それを調節しようといふ半ば無意識的な要求からも出てゐるのである。日本は民族的に恵まれた境遇を與へられて居るけれども、それだけ民族といふものを自覺するといふことが少なかつた。他の民族との交渉がヨーロッパほど激烈でなかつた。民族闘争が激しくなかつた。又多少あつたにしても、それは國內に於いて長い年月の間に解消して來たといふ譯である。

だが、國際關係と民族關係といふものは必しも相一致することは出來ないのである。例へば、ヒットラーやナチスの民族主義者が、ゲルマン民族が世界に於いて一番優秀であるといふことを信じてゐるけれども、併しラテン民族である處のイタリアと結びついてゐる。それからソヴェートは不倶戴天の敵の如く「我が闘争」の中には書いてゐるが、併し今の情勢はソヴェートとの不和を非常に恐れなければならぬといふ風になつてゐる。イギリス、スウェーデン、デンマーク、オランダはゲルマン民族である。アメリカもその根柢をなしてゐるのはゲルマン民族であるが、併しさういふものに對して、或はそれを征服したり、それと死闘を試みるといふやうな状態になつてゐる。さういふ譯で、同じ民族が強い結合をして、さうして縁の近い民族が互に親和するといふ民族主義の本來の主張は、世界の複雑なる國家

間の利害鬭争の下には必しも實現されてゐない。けれども、例へば今日の新聞等にも、ヒットラーはイギリスを叩き潰してしまふことはしない、これを叩き潰すことは新しいヨーロッパの處理の爲によくはない、といったことを語つてゐる、といふベルリン電報が載つてゐたが、これはイギリスに對するゼスチニアであるし、上陸作戦がうまくいかないといふこともあるだらうが、併しながら現在のやうに日獨伊同盟が結ばれたことによつて、全然民族主義が崩壊したといはれない。同盟を益々固くして、お互に共通の利害のために十分盡すといふことは固よりであるが、併し將來の民族的對立といふことに就いても、今から用意はして置いて、單に英米依存から獨伊依存に乗り換へるといふのでなく、そこに自律的態度を以て複雑な情勢に對應しなければならぬことは勿論である。

これは唯素人が觀た國際關係であるが、併し、文化的に考へてみると、矢張り民族主義といふものが政治を支配すると同時に、文化を支配するといふことは考へられる。我國に於いてもその影響を脱することが出来ない。併し、政治的若しくは産業的な國家對立といふものは、主として民族の利害に基づく處のものであつて、その影響はすぐ眼前に現はれ、その認識は比較的明瞭であらう。現に世界の各國は、あらはなる利害の衝突から、次第に露骨なる

産業的鎖國主義によつて相對立するに至つて居る。フィヒテが『鎖國的商業國家』といふ書を百年餘り前に書いてゐるが、それを思はしめるやうな状態である。併し政治的商業的鎖國主義に對して、文化的にも鎖國主義を採ることが出来るか。それは産業、商業、或は政治といふやうに容易には行かない。容易に行かないのみならず、さういふ鎖國主義の状態は、一時的の状態としては已むを得ないとしても、決してそれを世界の正常なる状態と考へることは出来ない。それで、前にもいつたやうに、國家的國民的の對立といふものが非常に強いといふことは、それはあまりにも國際的關係といふものが激しい、濃厚だといふ處から來るのであつて、國家的對立の激しさは、一面に於いて非常に國際的關係の深さを示してゐるのである。一體前にもいふ如く國際的といふことと、國民的といふこととは離すことが出来ないものである。だから、さういふ國際的對立が激しいといふことは、國際的交渉の密接を示すものであり、切り結ぶ大刀の下をくぐつての親和をさへ暗示するものである。

我々は今日飛行機その他の發達によつて、ロシアとかアメリカとかの存在を一時も考へずに居れないといふ風にされた。さういふことが文化方面にもなければならぬ。その上他を知るといふことは自を知ることであり、自を知るといふことは同時に他を知るといふことで

ある。本當に自を知るのには他を知らねばならない。又、自國の文化が起つて來るといふことも、常に歴史的に觀て他國との文化の交渉やその刺戟によつて起るのである。自の認識と他の認識とは離すことが出来ない

日本に於いて日本文化の認識が閑却されたといふことは、外國文化といふものを吸収するに急であつたといふ、現實の必要からも來たのであるが、それをもう少し根本的に考へると、實は西洋の文化をよくまだ認識して居なかつたといふことをも示すのである。西洋の文化の認識といふものが段々深くなつて來ると同時に、矢張り自國文化の認識を深くせずには居られぬといふ要求が起つて來るのである。故に、我々の日本文化の認識といふものは、さういふ風な正しい見地からなされて行かなければならないのであつて、唯單に小乘的に外國文化を排斥するとか外國文化に對抗するとかいふやうな立場からなされるべきではない。

哲學といふものの始終が、自分を知るといふことであると同時に、矢張りそのことは移して一國の文化、一民族の文化にもいふことが出来るのであつて、自を知るといふことは同時に他を知るといふことと離して考へることが出来ないのである。我が國民の自己批判、正しい自己認識といふものは、常に西洋文化、外國文化のより深き批判、より正しき認識と相伴

つて、進むべきである、又さうならなければならぬものである。さうして自國の文化に對する認識が深くなり、それから西洋文化の認識が高まるといふことに依つて、初めてそこに西洋文化を我々のものとして、それから東西文化の融合といふやうな、言ふべくして實現することの至難な、文化史的に偉大な仕事が増げられるのである。だから我々の文化にとつては、今日の我國の情勢から見、それから民族主義といふ立場から考へて見て、今まで閑却されてゐた自國の文化に對する認識を深くすると同時に、更に又一つの條件として、西洋文化の認識を深くするといふことが本當に必要である。殊に自然科学の領域、又文化科學の方面に於いても、長い歴史を持つてゐる西洋に及ばざる處が多々あるのであつて、まだまだ西洋から學ぶべきものは實に多いのである。西洋から學ぶといつても、學問の眞の探究は共通の中に特殊を、特殊を超えての普遍を我々に啓いてくれるのであり、眞の學問的精神が働いて居る以上、それが單なる模倣や追隨に終ることは出来ないのである。

我が國民の世界情勢に對する認識は、東洋の島國の中に安らかな夢を貪つてゐたといふ關係もあつて、非常に淺薄である。例へば英米との關係が少しわるくなると、文化的にも英米には一つも長所がなく、獨伊にいい處ばかりがあるといふやうに、國民の多數が考へ易いこ

とがある。これは日本人が文化的にも十分自主的でなく、腹の中に外國崇拜の陋習が存することを示すものである。併し國民といふものの文化の發達から考へると、外國の文化に對する好奇心と、外國の文化を知らうとする知識欲とは、國民にとつて必要である。近い例では、フランス文化は爛熟したものはあるが中々勝れたものである。我々からいつて學ぶべきものは多々あるが、併しフランス人は自國の文化で以て足れりとして、他國の文化から學ぶ心持が少ない。それに對してドイツは文化的にフランスの後進國であつたが、外國の文化から學ぶといふ心持が非常に強い。私の知人が外國に行つて居た時、自分の研究のレポートをフランスの大學に持つて行つても、頭から振り向きもしない。併し、ドイツに持つて行くと、中々注意してそれを見たといふことである。それからヨーロッパ第一次大戰後、ドイツ人は長い間自國の國に籠められてゐた鬱屈もあるが、洪水の如く諸國の旅行に出かけたが、フランス人はあまり外國で見かけることは少なかつた。さういふ點から見てもドイツ人は若々しい力に溢れてゐるが、フランス人は自分で收まつてゐて年をとつて居るといふ處が見える。

外國文化の研究、或は外國語を知るといふことは、單に外國から學ぶばかりでなく、自國の文化を擴げるといふ點からも、積極的な意味を持つてゐると思ふ。將來世界の文化に貢獻

しようとする日本人は、今の外國語排斥といふやうな議論に對して、深く考へる所がなければならぬ。

家族制度と生活の問題

我國に於ける家族生活の長所を保存助長せねばならぬ、といふ議論が主張せられ出してから已に久しい。さうしてそれが法律改正の主張となつて來るのも固より理の當然である。殊に近頃復古的思想の勃興と共に、この主張も一層熱を増したものの如く、議員選舉法改正要綱の中にも、戸主にのみ選舉權を與へ、現實の社會や政治に關心を持つだけの氣力のないよぼよぼの老人も、ただ戸主なるが故に選舉權を保有するのみならず、そのために壯齡の元氣な活動者が選舉權を奪はれようとする恐れのある主張さへ見える。これ等はいづれ論議と考慮とを重ねて、落ち着くべき所に落ち着くであらうが、私はこの場合一般に家族主義の復活といふことに就いて、所思の二三を陳じて見よう。

人間本性の要求

アリストテレス（であつたと思ふ）は、人間の家族的動物なるを認めると共に、國家的社會的動物たることを認めてゐる。さうして發生的には家族が國家に先立つが、原理的——價值的——には國家が家族に先立つといふ意味のことをいつてゐた。アリストテレスを待つまでもなく、家族が人間の最も自然的に、最も早く形造るところの團體生活であるといふ事實並びにその理由は、われわれの常識的にも首肯し得る所である。

家族生活は人間の本性が要求する所のものであり、従つてその意義も亦本來人間の本性、活動、生活を育成、助長するものたるべきである。併しかくして造られた人間の組織は、一般的にいつて、人間の生活を規定し具體化すると共に、又それを固定し、硬化し、それを抑壓又は妨害するものであり、家族生活も亦この例に漏れることは出來ない。

家族主義は平たくいへば家族生活を尊重する考へ方であり、それを更に具體的にいへば、家族を一般社會もしくは國家よりも尊重する、或は個人よりも尊重するといふ主張にさへなる。例へば大ざつぱにいつて、支那の儒教道德は家族主義的道德といつてよく、國家社會と

いふ觀念が明確でなくて、その主張にも往々家族を國家よりも重しとする傾向が見える。また在來の我國の家族主義なるものに於いても、家族の名譽や利害のために個人を犠牲にすることを厭はぬといふ主張は、明かに看取せられる。併し家族といふものが血族を中心とする個人を成員とし、社會や國家の中に存在する以上、その家族偏重の生む國家の輕視又は個人の無視といふものの或る程度までは認められる理由も亦、家族に於ける個人の位置、國家や社會に於ける家族の狀況から採し出さるべきものであつて、かかる位置や狀況の無視せられた家族主義の成立し得ざることも亦勿論である。

社會變化による破壊

われわれがこの場合考へねばならぬことは、日本人たるわれわれの在來有した家族生活もしくは家族主義が、著しく破壊せられて來たといふ事實であり、それと同時にこの事實が社會變動の必然性と人間本然の要求とに基づく所もあるといふその理由である。我國に於ける家族が公的社會的意義を持つてゐたことは、例へば江戸時代に於ける大名や武士の家名斷絶の重大性に見ても首肯し得られる。かういふ家族、或は苗字をさへ名乗り得なかつた百姓町人までも家族が、徳川の封建的社會に於いて、この社會と離され得ぬ重大な社會的、公的存在たる意義を有した點に、家族生活の重大性従つて家族主義の強い主張が根據を有してゐたことを考へざるを得ない。ところが封建社會の崩壊と共に、かかる社會に依存した家族生活が崩壊を免れなかつたのも亦、必然の勢だといはなければならぬ。新たなる社會生活を開拓するものは、多くの場合に舊い家族的生活の桎梏を押し破つた人々であるのみならず、かくして新たに出來た明治以後の社會生活が又、從來の家族生活と相乖く所のものとなつて來た。

例へば家族生活の安定は、その家定の安定に伴ふものであるが、明治以後の主として産業上の變動は、この家定の安定を許さず、家族の成員、殊にその年少層をしてその郷土に落着かせず、彼等を火にたかる夏蟲の如く都會へ都會へとおびきよせ、そこにあわただしい生活を営ましめるやうになつた。農村生活の疲弊が、一國の家族的生活の基礎を成してゐた農村の家族的體制を破壊したことはいふまでもなく、大規模の産業組織が、その重役をして家庭に食事を取ること少なからしめ、その勞役者を家族から引きはなし、その子女を家族的團欒やしつけから遠ざけて、荒涼たる生活の裏に投じたといふ事實だけを見ても、新しい時代

が家族生活を破壊した跡は、いやといふ程われわれの眼前に示されるのである。

家族生活の固定

以上は急激なる社會の變化による家族生活の破壊の實例であるが、他方、家族生活の固定が個人の上に加へた抑壓も亦、内からして家族生活を破壊する力となつて來た。これは一方には思想の變化にも依るのであるが、他方には新たな社會が個人の力の發揮を必然的に要望するからにもより、また更に一般的には家族生活の健全なる状態が、本來個人の力を育成し、これが發揮を助けるにあるのに、その硬化と固定とがこれを妨害したことに基くのであつて、人間生活の本來の要求の促したものと見るべく、一步を進めて本來あるべき家族生活の、いのちを失つた家族生活に對する抗議と考へてもいいであらう。これは家族生活が安定を條件とすると共に保守的固定的になり易い所から來るものである。勝海舟の如き傑物でも、人間を弱らせるもの一家の煩勞に及ぶはないといふ歎きを、つくづくと洩らしてゐる。家族の中に停滯せる空氣が、人間を窒息せしめる力の大きいことは、實に思ひ半ばに過ぎるものがある。

明治以後でも、いかに有爲の青年が、家族主義の名の下にその生命を臺無しにしたか。恐らくわれわれの想像以上のものがあるであらう。そのうへ家のため家名のためといふ口實のもとに、さまざまの私利私慾が遂げられ、さまざまの決斷が鈍らされた例も極めて多い。いかに多くの伯父達が家の爲だといつてその甥達の財産を奪つたか、いかに多くの場合家の體面の維持のために下らない無理が行れたか。

父子本位と夫婦本位

家長の下に於ける大家族の團欒といふことは、今の社會に於いては到底實現され得ない。それは場所的にかういふ風な血族的關係を有する大家族の共住もしくは群居が許されず、家族の成員が各々その生活を追つて思ひ思ひの土地に住むからである。それにかういふ生活に最も適した農村が又、都會生活の刺戟に促されて、さういふ生活を殆ど不可能にしてゐる。大家長といふ程でなく父母と息子及び嫁との共棲といふことも、事實に於いてだんだん減少し、家族は父子本位より夫婦本位に移りつつあることも否定せられない。これは固より西洋思想の影響にもよるが、また現實の社會的状況の規定する處でもある。即ち事實的に父子相

離れて住む場合の多いと共に、子たるものの社會的活動が、兩親の規制下にある生活を許さないのにもよるのである。従つてそれは現代の社會に於いては可なりの程度まで止むを得ざることである。

社會の繁忙が家庭に於ける仕事を奪つた實例も數々ある。例へば昔の家には、その藏の中に饗宴の時に用ひる食器が多分に用意されてゐたが、かういふ大規模な饗宴を設けることは、今の家庭の到底堪へ得ざる所である。かくしてかかる饗宴の主として家庭外に於いてなされることも亦、家族的空氣を稀薄にした一例に擧げ得られるであらう。而もドイツ人の如くに簡単な食事で友人を夕飯に招待するといふやうな風も未だ行はれず、他方には他人の生活を妨げることを顧慮しない不時の訪問者に對して、家婦は絶えず食事を用意しなければならぬといふやうなこともある。かかる例を擧げたのは、家族の中に於ける仕事が家族外に取り上げられると共に、家族の中に秩序と落着きとの見出されない實情の一端を示したに過ぎない。これを要するに家族主義の復活は、固より家族生活をそのまま昔に歸すといふことではあり得ない。

現在の時勢に於いて家族主義が特に唱説せられる所以は、果して何處にあるであらうか。

先づ唱説者の考へからいへば、これも恐らく日本精神への復古の主張の一つであり、家族主義に於いて日本の國柄、日本人の性質の好所を認め、家族生活の裏に醸成せられた淳風美俗を復活したり保存したりするにあるであらう。

大體に於いて家族主義に日本の國柄の好所を見出すといふ考へは中つて居り、それをめぐつて幾多の淳風美俗の存することも事實である。併し今の時勢に於いては、復古といふことも、結局古今を貫き東西に通ずる本原的な精神を把握して、その發展する生々のいのちを生かすといふにあり、過去の色々な事實を列擧してそれを固定し、さうしてこれを今日の我々の行動の標的とすることではない。日本精神か西洋思想かといふ風に二者擇一の簡単な機械的な取捨をすることは、今日の時勢に於いては許されない。

家族生活が人間の本来の要求する所であるを思へば、我々は家族生活によつて、我々の傷はれた自然さを取り返し、且これを育成して行かなければならない。同時に過去に於ける家族生活及び家族主義の硬化が、人間の素直な自然と潑刺たる理想とを壅塞したことを考へれば、家族主義の復活がこの弊害を再びすることを、あくまでも避けなければならぬ。いはゆる淳風美俗なるものも、今日の社會的條件に於いて助長し得られる限りのものでなければ

ならないこと勿論である。

家長の権力と負擔

一家の戸主となる長男が弟妹を扶養するのは美風に違ひないが、それよりも今の世の中では、次男や三男の妄りに長男に依頼する風を打破しなければならぬ。親類縁者の扶養についても同じことが言ひ得られる。家族の成員に獨立の氣性なく、徒らに他を頼むことが、如何に相互の親愛を害し、家族の平和を害して居るか。朝鮮では昔郡守をすれば、王様への朝貢を掠めることによつて、二三年にして一生涯の生計の資を得られたといふ話であるが、今の郡守の中には、その位置をたよつて來る親類縁者の寄食に堪へ切れず、自殺をした者さへあるといふ。西洋のいはゆる個人主義は私利私慾主義と解せられて、例へば闇取引の如きが個人主義の實例に引かれてゐるが、個人の尊重が自ら重んじ自らの權利を主張すると共に、他人を尊重してその生活を妨げざらんが爲に自力を盡すといふ良い方面は、今まで閉却せられた嫌ひがあり、家族主義の名に庇護されて、個人の獨立心と責任感との不足が多く咎められずして、却て一方に過重の負擔に喘げるものに鞭打つといふ嫌ひがなかつたとはいへない。

だから新しい家族主義は、昔の如く家長に絶對の權力を與へぬと共に、家長に過重の負擔を課せぬことを心がけねばならない。それはかくの如き權力と負擔とが今の社會に於いて許されざるものであることはもとより、更には家長をして家族成員の生命力を抑壓せしめず、また自分の生命を窒息せしめぬ爲に、缺くべからざる用意でもある。人間の理想とする個人の自由と全體の統制との兩立は、血縁の親しみが自然の愛情のある家庭に於いてこそ、最も多く實現の望みを寄せ得るであらう。

學校教育と家庭教育

舊い家族體制の崩壞が家族生活に於ける淳風美俗を破壊したのみならず、家庭に於ける教育と訓練とを奪つたといふことも亦、否定せられない。明治以後の學校教育に就いては、近來頻りに非難が加へられるけれども、それが舊き家庭教育の興へ得ざる多くを興へたといふ功績は、ややもすれば看過されがちである。併し他方工場生活が家族生活を破壊したやうに、學校教育が家庭教育を破壊したといふ一面も亦、これを抹殺することは出來ない。いはゆる家族主義の主張は又、舊い社會の崩壞と共に失はれた教育と訓練としつけとを新しい家庭に

向つて要望するであらう。

併しそこにもやはり児童の人格に對する尊重は必要であり、また父兄の教育が、自分の欲する所を無理に児童に課せんとして、結局自分の私を児童におしつけた弊も亦、當然避くべきであるが、併し家族の一員としての奉仕や服役は、むしろ昔に歸つて強調せられていいのではないか。いはゆる洒掃、應對、進退の節は、やはり家庭に於いて、その家族的生活の裏に於いてしつけられるべきであり、この點殊に知識階級の家庭で閑却されて居はしないかと考へる。家庭生活が愛を基礎とすることはいふまでもないが、むやみに児童を甘やかして、父母の足手纏ひとし、その獨立の氣性を傷はしめる軟教育の弊は、日本の家庭に於いて特にその甚しきを見るのではないかと考へられる。何れにしても親愛の情味ある團欒の中に節制あるしつけがあつて、そこにより家族的空氣の醸成せられることは、將來の國民の訓練の爲に最も必要であることに異議はあるまい。

家族主義の擴充

次に與へられるのはこの家族主義の擴充である。例へば工場の荒涼を家族的親愛によつて

潤さうとする企ての如き、また學校生活に於ける師弟の親愛を強化しようとする企ての如きはこれである。これは昔の工業が主として家庭工業であり、その徒弟關係が一方に於いて相手の人格を無視する如くであつて、そこに親身に似た愛情も存したやうな點、教育に於いても少數の弟子が師を敬愛してその周圍に集まり得た點に見て、大體に於いて家族的であつたといへるであらう。併しかういふことは、教育でいへば大いなる學校組織、それにも増して大工場などに於いては、中々實現が困難である。これは教育者と被教育者と、經營者と勞役者との相互の尊重、共通の意圖、理想、感情が存するものでなければ、容易に庶幾することは出来ない。

次に問題になるのは、家族とその家族の置かれた社會、もしくは國家との關係である。例へば支那などでは、政治の力の薄弱が人民をして政府と國家とに依頼せしめず、自力によつて自家の利害を防護するといふ必要を生じ、そのために家族的もしくは血族的團結を固くしたといふことが認められるのではないか。かうした家族的團結は、國家としての強固を増し國民としての親愛を感じしめるよりは、むしろ國家の存在を無視するといふ勢を馴致したのではないか。將來の支那はいざ知らず、過去の支那には多分にさういふ傾向が存した。支那

が國家としての組織のわるさに拘らず、支那人のしぶとい生活力が日本人を脅かすのは、勿論その原始的な心身の強靱にもよらうが、又その家族主義的な結紐の強さにもよるのではないか。

日本に於いて皇室が國民の宗家であり、日本國が皇室を中心とせる多くの家族の集まりとしての一大國家であり、従つて我國に於いて初めて忠孝一本が可能であるといふことは、まことに有難い極みであるが、この理念は國民と爲政者との努力によつて更に現實化されねばならない。皇室の尊嚴をあくまでも維持すると共に、國民をして皇室に對して宗家たる親愛の情を寄せしめることは、やはり爲政者の責任ではないか。かくして家族生活が個人の生命を壅塞することなく、國家といふ一大家族の下に相協和して違はない家族たるを得るならば、そこに我國の家族主義は初めて理想的な家族主義たるを得るであらう。(昭和十五年十二月十五、六日)

知識人の反省

「知識は憂患の始」といふ詞がある。確かにさういふこともある。知識があればこそ思ひわづらふといふことが起る。無知であつたら、或はめくら滅法に或は氣樂に決定の出來さうなことが、なまじいに知識のあるため、味噌も糞も無造作に一緒にして收まつて居るわけには行かない。知識は分別である。黒は黒、白は白と分ける働である。かく分けて黒は黒の居るべき所へ、白は白の居るべき所へと、ときばき凝滞なく處理することが出來れば、何の煩ひもないわけだけでも、事實は中々さう行かない。黒を黒、白を白と分けることは、同時に黒をどうするか、白をどうするか、黒を立てると共に白をも立てようとする思ひ煩ひを呼び起すことが多い。すべて不決定の状態は同時に不安停滯を伴ひ易いものであり、これが知識ある者の患となるのである。

上にいつた知識の働はいはば分別であり、相異なるものを相異なるものと知りながら、これを一緒くたにして簡單にかたづけるところの出来ぬ悩みである。この分別即ち論理的にいつて分析は、知識の知識たる働であり、學問は主としてこの分析によつて出来るのである。だから我々の問題、我々を圍む社會的歴史的問題、自然界の對象にしても、知識の働としてはさしむきこの分析を徹底することが必要である。物の黑白が辨別せられ、黒が黒の居るべき所に、白が白の居るべき所に置かれると共に、兩者を貫き或は結ぶ所のものも初めてしつかと把握し得られ、かくして内容ある綜合の働も亦遂げられるのである。よく西洋精神は分析で東洋精神は綜合である、といふやうなことが無造作にいはれて居る。大體からはさういふ傾向は認められる。これが西洋は科學的で東洋は藝術的だなどいはれる所以でもある。藝術に具體的綜合が必要なはいふまでもないが、その爲には亦纖細な陰影の辨別が必要とせられるのである。たゞそれが比較的無意識的になされるといふことはあらう。この頃の論者のやうに西洋は分析だから駄目だ、東洋流の綜合で行くべきだとたやすくいつてのけるのは考へものである。我々自身並びに我々の周圍の問題は、中々直觀によつて綜合的に一舉に把握し得られるものではない。我々の思惟の根柢にはかうした綜合的直觀を前提せねばならな

いが、この直觀が我々の分析の働にいはば分岐すべきものであり、我々の分析の働はいはば直觀に歸一すべきものであり、我々の知識の働に於いては、この上からと下からとの働が相錯綜したり、相對立したり、相協同したりして、そこに何等かの統一が生ずるのである。それを一舉に綜合だけにかたづけたり、分けられた局部の世界に立てこもつたりしない以上、知識の道に進む者に苦勞のあるのは已むを得ぬことである。結局分析も綜合されねば意味と生命とを得ないし、綜合も分析を待たなければ内容空疎なものとなりがちなのである。

かく知識は先づ分析であり、殊に科學に於いては分析が主を占める。分析なくして科學は成り立たないといつてよい。併し又知識の根本は綜合にある。殊に分析せられた多くの現象や多くの問題を前にして、これを意味あるものとする爲には綜合が必須であつて、この頃哲學の方面に人生觀とか世界觀とかの要素が要求せられるのもその爲である。客觀的な對象としての綜合——よしその統一原理が主觀によつて與へられるとしても——だけでなく、客觀を主觀によつて、物を我によつて、或は物と我との一體によつて綜合することは、我々が自覺的に生きる爲には是非要望せられざるを得ない。哲學は何等かの意味に於いてこの人間的要望に参加しないものはない。

知識が分別をする爲統一しにくくなると共に、多くを知つた結果視野が廣くなる爲に、統一しにくくなるといふことがある。本當の知識といふことと物知りとは固より同じでないけれども、併し知識のあるといふことは自然知ることの多いといふことであり、又或る程度まで多くを知るといふことが必要な條件でもある。併し如何に多くの知識があつても、この色々な樹木のある森を、ただ漫然と散歩して居るばかりならば、別に苦勞はない。多くを知つて居るといふそのことだけで、けつこう優越を感じて十分に樂しめる人も世には多いのである。併しこの多くて廣い知識を統一し組織して意味あるものにするといふ要求が、即ち苦勞の種を作るのである。多くを知り廣くを知れば、それだけまとまりがつきにくく、決定が困難になるのである。兎も角も視野が廣ければ、これを統一して強い中心を握ることが困難であり、殊に我々の感情を集中したり、意志を集注したりする爲には都合がわるい。例へば人の行爲の價値を判じてそれに對する態度をきめる場合に、その人の一面だけしか見ないで、直ちにこれを善とか惡とかきめてしまふ方が、決着がつき易い。だが簡單に少數の條件でものをきめることが、知識人には出来ない。色々な條件を並べて居る中に、善と思つたものも必しもさうでなく、惡と見たものも必しも惡ではなくなる。従つて又それをどう處置すべき

かが決定出来ない。殊にこれが理論的問題でなくて實踐的問題である場合に於いてさうである。社會の推進力が、動もすると狭く一つの事ばかり見つめてこれを固執する狂熱者の手に歸するのは、即ちこの知識人の缺陷に乗じたものである。だから廣闊なる視野、公平なる見方と共に、強く中心を掴みとる識見、即ち統一ある知識が必要であると共に、この中心を掴んで一步躍進してゆく冒險が、この識見の試煉として、この識見を生活力とする爲に要望せられる。

知識人が社會の生きた動きに對してややもすれば無力を呼ばれる理由は、第一にはさういふ對象が生やさしくは我々によつて認識し得られず、先づ認識して行動しようとする知識人を動かさにくく、その一端や一角を把んで全體を知り得たとする人にとつて、却て行動に成り易いといふことによる。第二には知識がややもすれば懐手の見物に成り易く、さうした社會の動きを自分の事としてでなくてよそ事として見る、従つてそれに對して斷片的に鋭利な氣のきいた批評を下しはするけれども、統一ある識見をそれに對して持ち得ないのみならず、この社會の動きを主體的な働として自分の行動に移し得ないといふ傾向のあることである。かくして知識人は自分をさうした社會の動きの圏外に置いて、出来るだけそれから逃避しよ

うとはするが、實際はいやいやそれに引きずられて行くといふことになり、これに對して又これと共に積極的に働いてゆくことが出来なくなるのである。これは又社會國家の支配者の知識人に對する扱ひかたにもよるのであつて、あなたがち知識人のみを咎めることは出来ないが、併し知識人のかうした態度を以て決して知識人の本領と讚美するわけには行かない。むしろ知識人の陥り易い弊害だといはねばならない。

知識の沙汰が動もすれば觀念の遊戯にあるといはれるのは、知識の志す統一と整理とが現實を遊離した觀念の世界に行はれ易く、困難を去つて樂易に就かうとするによるとも考へられる。併し知識が本來は現實の整理であると共に、現實の方向を示すといふ理想的意義もおのづから得來るのである。知識人の無力は、彼の有する知識が、現實と遊離した世界に於いてのみ活潑に働くといふ傾にもよるのである。同時にかういふ知識で現實を動かし得ると考へるのは、知識人の僭越と無反省とを示すものに外ならない。現實を動かす爲には、現實を通じ現實の中に苦勞して、更にこれを抜け出でた知識でなければならぬ。「山に入る者は山を見ず」といふけれども、山に入らずして山を外から見ただけのものも亦、山を知る者とはいへない。彼は山に就いて何の行動力をも有することは出来ない。山に入つて更に山を出づる

者にして、眞に山を知れりといふべきであらう。

知識は廣く見わたすと共に又細かく分け入らうとする。無知なる者、淺知なる者が、黒白を混同し、又部分を全體と誤ることの出来る爲に、行動に入り易いといふことがあると共に、知識人はその専門の知識に狭く入ることによつて、その世界に執し全體の世界から離れるといふこともある。彼等の中の無反省なるものは、その自分の世界を以てあらゆる世界を律しようとし、彼等の中の獨善者は自分の世界あるを知つて他の世界の存在を忘れんとする。けれども専門の知識は、畢竟有限なる人間の知識の生んだ合目的性の産物であつて、その世界は決して全體の世界と孤立して獨存するものでないことは勿論である。否本當の専門家は恐らくこの狭い世界を通じて全體の世界との繋りを深識する者であり、自己の脚下を掘つて地底に遍在する泉に當てるものであらう。更にかうした狭い世界への深入といへども、又社會の制約の許す範圍を越えては育つまい。この制約の不當なる場合もあらうが、あなたがちこれを不當とのみ見て、全體や社會への無關心を正當化するわけには行かないであらう。

學問は事後の説明であるといふ風なことを高山樗牛がいひ、私も青年時代にこれを讀んで感心したものであるが、樗牛は事後の説明がその事を自分のものにし、更に新たな發掘を

促すといふ意義に就いては追究することがなかつた。ニーチェは學者をマッチに譬へ、ものにすりつけることなしに自發的に火を發しないといつたが、凡そ火にして外からの刺戟と外なる條件とによつて發しないものはないであらう。知識は所動的なものであり、相手に促されて立つものだといつて、知識を非難するものもあるが、本當をいへば所動と能動とは對偶的なものであり、互に一方を離れて他方は存立し得ないのである。スピノザは知識の能動性を力説して止まなかつたのである。彼は感情を以て知識の action に對する Passion (所動)の謂であるとなした。我々が感情の状態にある時は、我々は他からの刺戟に對して受身の状態にある。例へば我々が恐怖の状態にある時の心的並びに身的姿勢は、これを證して餘蘊なきものであらう。我々が枯尾花を以て幽靈と驚いた時は方にさうである。併し枯尾花を枯尾花と知つた時は、自分を取り返して能動に居る時であらう。知識はかういふ意味に於いて能動に居なければ働かない。併しその前に刺戟に動かされ刺戟を受けるといふことが必要である。世の中の現象はかういふ刺戟を受けて立つことによつて推し進められるが、又刺戟にかきまはされることによつて動かされることが多い。この時に當つて自主的な能動的な知識によつての行動は寧ろ少ない。世間の大衆は噴火山上の亂舞を楽しみ得るといふことも多いが、

又一方からいへばあらぬものをありと見、來るやら來ぬやら分らぬものに危惧することが多い。人間は眞の現實に面接してこれを認識した時よりも、あるやらないやら來るやら來ぬやら分らぬものに煩はされることが多い。世間の混亂はここから生ずる。知識人の任務はこの能動的な認識の力を發揮するにあるであらう。(昭和十六年五月二十四日)

鍊成と學問

鍊成は我國現代の流行語であるのみならず、官私の鍊成所が方々に出來、又鍊成の實行が到る處で試みられて居る。鍊成は確かに今日の重大時局の生んだ一つの現代的な現象といつてよからう。鍊成が世間で現代に最も必要適切なるものと考へられる一方に、他方學問はそれに比べて動もすれば輕視せられ、時には無用視せられる傾がある。少なくともさういふ風な言辭を弄する者が見受けられる。現代の教育が知識偏重の弊を有するといふのが、一般の常識であり、これに對して鍊成は意志と實行とを尊重するものとして、即ちいはば現代の教育の主知的なるに對して、主意的若しくは主行的なるものとして、方に現代教育の缺陷を補ふのみならず、それに積極的な新生面を與へるものと信ぜられて居るやうである。今一つは鍊成が我國本來の精神に根ざせるものであるのに對して、學問は明治以來西洋的になり、殊

に一部には敵國なる英米の精神に歪められて居ると見る者があり、日本的復古精神の主張と西洋的外來的精神乃至文化の排斥とを抱き合せて、鍊成と學問とに向ふところの傾きも亦乏しくはない。上の如きは通俗的常識的な今の鍊成論の主張らしく、それは必しも中らぬものではないが、併しそのままには承認しがたき要素を多分に含んで居る。

、^F張の根柢には物我又は物心一如、從つては身心一體の東洋的原理の前提されて居る。この一體を前提して、この一體を自覺し、單に自覺するのみならずこの一體の標的が置かれる。さうしてそれに向ふに當つて、純^正雜心とかいふ心構へが要求されること勿論であるけれども、^レが常例である。つまりからだの構へがこ^レしけられる。固より身心は相關的である。又、からだの構へを規定することは

、併し冷い水の中に飛びこむといふ肉體的わけであらう。かくして精神的目的が常に肉

體の行動によつて目がけられ、肉體的行動が精神を刺戟したり規定したりすると共に、精神が肉體的行動に具現せられ、かくして心身一體の境地としての自由自在境が求められ、心を正すのが目的であつても、心を正す爲には先づ身を正さねばならず、心の正しさは身の正しさとして具現せられねばならぬといふのが、東洋流の鍊成の主張と見てよからう。併し身と心とがその本來あるべき一體をびつたりと具現することは、中々容易でない。そこでその爲には單純なものから反復する必要がある。稽古とは即ちこれであらう。鍊成といふ詞は、この稽古即ち練習によつてこの一體を實現し完成せんとする行だといつてよからう。我國に於ける武道でも藝事でも、皆この原理の上に立ち、その至れるものに至つてはこの一體を實現し得たといつてよい。更に繪畫や俳句などに於いても、さうした境涯が昔から目ざされて來たのである。藝が身につくといふ詞は、即ちこれを示すものであらう。さうして身につくまでには「たたきこむ」ことが必要とせられた。「たたきこむ」といふことは一種の強行であり、自然の征服である。而もその標的は第二の自然の建造、若しくは本來の自然への歸一であつた。

學問とは簡單にいはば組織された知識であり、それを言ひ換へれば統一された知識であり、

この眞の統一を求める欲求が即ち攻學心であり、知識欲である。東洋であらうが日本であらうが西洋であらうが、この一事に變りはないはずである。學問に於いては、今までの統一原理を疑ひ又はこれを打破して、新たな統一原理を求めることはある。けれどもこれも眞の統一を求めんが爲のなやみに外ならず、學問が統一された知識であらねばならぬことに動きはない。併し統一は統一されてないもの、即ち混亂せるものに加へられて初めて意味がある。けれども統一を與へる爲には、この混亂せるものが分別されねばならぬ。だから分析は統一の初めだといつてよい。單純なるものには統一の必要が見出されない。多岐多端雜多なるものに對して初めてその必要を見るのである。雜多に觸れてこれを把握せんとする實證的精神が、この雜多なるものを分別し又統一せんとする論理的精神と共に、學問の成立に缺くべからざることは、特に自然科学に於いて明かであるが、所謂文化科學に於いても亦、この兩方面を缺くことは出来ない。論理的精神も實證的精神も、實は共に我々の觸れる現實を確かに把握しようとする我々の知識要求に根ざせるものであるが、それが一方に偏して或は抽象的觀念的統一の徹底を急ぐ爲に、或は現實と遊離したり、或は雜多の世界に深入して現實に捉へられたりして、共にその本來の目的を逸し、學問の本旨から外れることがある。けれども

その弊は兎も角として、學問がこの二方面から自然と人間との世界を把握し、これを人間のものとした功績は認めなければならない。西洋の學問は東洋よりも一層組織的體系的だつたことによつて、より多く學問的であつたといへる。さうしてかく組織された知識になり得たことが、その知識を普遍的ならしめた。それを今少し具體的にいへば社會的ならしめた。更に平たく崩していへば社會共有のものならしめた。さうして歴史的遺産として確實に後代に傳へ易からしめた。かくて學問の社會的擴布と共に歴史的發達の多かつたといふことが、西洋文化に學問的要素を豊富ならしめた原因であるといふ事は、これを否定することが出来ない。日本に於いても學問的發見や學問的實驗や學問的原理がなかつたわけではない。併しそれが體系に發展することが少なかつた。従つてそれは學問の體をなすことが少なく、又社會的擴布と歴史的發展とを遂げにくかつたのである。これは即ち西洋の學問が個々人の所得たるに止まらず、一つの客觀的な文化財たる形をより多く備へて居たことを示すものである。そのかくなり得た理由としては、物我の對立を意識して、我によつて若しくは人間によつて、物を若しくは自然を征服しようとする西洋流の生活態度が、與かつて大いに力があるであらう。かくして學問に於ける主客の對立から對象の意識がはつきりして來て、對象を客觀的に

認識し、それを觀察し、實驗し、剖析するといふ仕事を、組織的に秩序的に進めてゆき易かつたといへるであらう。

極めて大ざつぱにいつて、物我一如、主客融合の體驗を重んずる日本流若しくは東洋流のやりかたでは、學問が身についたものとなること、即ち個々の人間に於いて完成することが求められ、學問に藝術的若しくは宗教的要素が加はり易くなる。さうしてそこに又鍊成といふことが一役を買つて出る理由も存するのである。學問が師承せられ、藝術や技法に祕傳祕法が尊ばれるに至つたのも、それに基づくのである。併しかういふやりかただけでは、學問が學問として十分な發達を遂げ得ず、技術が社會的に擴布し得ぬことを認めねばならない。

西洋の學問が、如上の性格から、學者の個人に於ける主客の融會を直接には目がけずして、その學問の客觀的存在を成長させたといふことは、決してそれに應ずる主體的心構への皆無を意味しない。學問が人間の生活意志に根ざして居る以上、かかることは不可能である。西洋の學問も亦、確かにその成果を生む基礎として又これに應ずる態度としての心構へを持つて居る。ところが西洋の學問を輸入して以來百年に満たぬ我國では、西洋の學問をその學問的精神からして根柢的に攝取するといふことが十分でなく、従つて單に出來上つた科學的成

果を外面的に採用するといふ弊なしとはしなかつた。學問界が輕浮な流行に動かされたり、學者の仕事が動もすれば模倣の易きに就きたがつたり、紹介に終始しがちになつたりしたのも、その爲である。而も所謂日本精神の主張者は、かうした段階に於いて採り入れた西洋學問を以て、直ちに西洋學問そのものだとし、西洋の學問の客觀性を輕易に唯物的だとし、その精神から引き離してこれを處理し得るものと見る傾きがあつた。偶々西洋的精神の排撃にも拘らず、西洋的技術の益々必要とせられる重大時局の下にあつて、それが無意識的に現下焦眉の必要を充さんとする功利的意圖に従へられ、西洋流學問の成果を日本魂で運用するといふ、お手輕な和魂洋才説をこの間に乘ぜしめるといふ勢をも成したのである。固より今度の大東亞戰爭に於いて、飛行機其他の西洋武器を西洋人以上に運用し得た事實の如きは、たしかに和魂洋才のすばらしい發揮といふことは出来る。併しこれとても科學的技術の體得の後に始めて可能なことであり、武器と人間とが一體となる物我一如の境が、單に非科學的に行き當りばつたりに得られたものとは信ぜられない。

技術を學ぶに止まらずこれを體得するには、日本傳來の鍊成がたしかにものをいふ。それは即ち科學を身につけることによつて、更に其以上の物我一如の自在境を開き來つた。けれ

どもこれは科學を踏んで飛ぶといふことであつて、それを抜きにして羽ばたくことではない。だが上の事實は又西洋の學問に何等の鍊成的要素がないことを語るものではない。西洋の學問の範圍が東洋の學問の範圍より廣く、その内容の一層複雑多端であることの、その對象化即ち客觀化を必要としたといふ事情が、學問を主體に對する客觀として對立せしめ、又その抽象化を促したといふことは認めねばならないが、この客觀化も抽象化も、學問の方法及び段階としては必要なものであり、初めから主客融合であつたり、又容易に學問が身につけてしまつたりしては、學問の成長はあり得ないのである。我國現代に於ける學問の通俗的見方は、この客觀化や抽象化を主體的な精神と切り離して一面的に見ることによつて、西洋學問の全體的性格を逸する弊があると共に、上にいつた如く、この一面的見解を功利的に適用しようとする傾きなしとしない。一方文化科學方面に於ける日本の歴史的文化的研究に於いては、動もすれば餘りに粗笨なる體系化、組織化が、かなり甚だしい個人的肆意の下に行はれて、むしろ不思議にもここに却て最も悪い意味での西洋學問の弊害が暴露されてゐる。而もそこには學問も鍊成も見出されないといふ状態である。如上の事實は、日本人が西洋的學問の弊を受けたことを語ると共に、又西洋的學問を本當に學び、その技術を十分に體得するに

至らなかつたことを語るものでもある。西洋學問が日本人の學問となり、日本人の身につく爲には、そこに何らかの意味の鍊成が要求せられる。かくして西洋的學問を鍊成と兩立し得ずとする見解も亦、是正される事であらう。但し西洋の學問が前にもいふ如く、物我對立の自覺から我による物の征服を志すところの生きかたに基づき、日本若しくは東洋の學問が、物我の一體を前提してその自覺を體現するといふ生きかたに根を持つといふ大體の方向を承認すれば、これも上にいつた如く、西洋の學問が一方に理論的に、他方に於いてこの理論に基づいての客觀界への働きかけといふ意味に於いて、技術的・實踐的であるのに對して、日本の學問が、物我一體の自覺の我に於ける實現として、初めからより多く實踐的意義を有し、従つて鍊成の要素を多分に含むことを認めてよからう。

客觀世界を支配するといふことは、あらゆる人間の生活意志である。併しこれを支配する爲には客觀世界に成り切ることが必要の徑路でもある。理論と認識の世界を純粹にする爲に、理論を實踐より分ち、認識を意志から分つといふことは、實踐を我々の生活から驅逐することではない。否大いに實踐せん爲に認識するのだといつてよい。西洋の學問のかうした趣旨は、現在及び將來に於ける日本の學問の發達の爲に、缺くことは出来ない。ただ併し西洋風

の學問否學問一般に於いて、學問が單に抽象的な理論的組織であるに止まらず、學者によつて體得せられ、學者の所有となり、その生活意志と合致したものとならねば、學問は本當にその力を發揮することは出来ない。かかる意味に於いて西洋の學問そのものは、日本に輸入された西洋學問に比べて、社會的傳統によつて西洋人の生活に根を持つと共に、又學者個人の身につくことが多かつたといへよう。かういふ點に於いて學問に於いても亦鍊成の要素が顧念されてよからう。

終りに現時の鍊成についての管見を述べる。鍊成は前にもいつた意味に於いて個人的なものであつた。身心の一如といふ理想を目がける以上、鍊成の團體的成就は困難である。而も今日に於ける鍊成は團體的に行はれ、又團體的行動の基礎として行はれるやうである。そこに鍊成そのものに對する反省と工夫とが施さるべき餘地が存する。鍊成は端的なる實踐である。かういふ實踐を要求するもの一つは、たしかに現下の重大時局であらう。併し端的が速成に走せ、そこにあせりがあつては、鍊成の目的は達せられない。鍊成の指導者はそこに思ひを致さねばなるまい。鍊成は或る場合に強行的なる非自然的なる自然の征服である。併しその目標とする所は自然の成就である。だからそこに痙攣的なる自然の法則の無視や科學

の無視があつてはならない。鍊成はその強行なる性質上、被鍊成者の意志を無視することもあらう。併し師家の鉗鎖に甘んじて精進するのは、修道者の一念發起によらねば不可能である。この一念發起は一大事因縁に促されたものであらうが、これこそ私にいはせれば一つの自由意志である。放縱主義の意味に於ける自由主義は排撃すべきであるが、それと卷添へに自由意志をも否定しようとする傾がある。併し意志の自由を認めねば、人間は自覺なき動物となり、如何なる意味に於いても道德は成立し得ない。これは洋の東西を擇ばざる普遍的事實である。鍊成がこの一事を忘れず、この自由意志を呼びさますのでなければ、百の鉗鎖も竟に徒事に終るであらう。(昭和十七年六月十四日)

文教問題雜見

私は自分の職業柄、若い者だとか、國民學校の先生などには時々話をすることがありますけれども、今日のやうにお歴々の長老方の前でお話することは、殆どございません。皆様にわざわざお集りを頂きましたことを恐縮に存じます。

私は十五年ほど朝鮮の京城帝國大學に居りまして、ちやうど去年の今ごろ歸京いたし、只今では一高に居ります。東京へ歸りました時、ある人が、「現代の教育は、非常に政治性をもつてゐる、だから一高校長としてのお前の成否は、如何にこの政治性を會得して教育をやるかにある」といふ忠告を興へてくれました。なるほど、國家がその全力を賭して重大な危局に對處しつつある時、而もその國家の興廢が決して安心のできぬやうな状態にある時、その國內に存在し或は發生する何事によらず、すべて非常に政治性を帯びるに至るのは當然で

あります。ヒットラーが『我が闘争』の中で「文化の問題は、非常に重大である。しかしながら、今は政治問題が一層重大である。これを解決しないで、文化の問題を解決することはできない」といふ意味のことをいつたのは、私の十分首肯するところであります。けれどもわれわれ教育者として、良い意味に於ける政治性を教育に持たすためには、一體どうすればよいか。これが一つの大きな問題であります。

「今日のやうに國情の緊迫した時局に於いては、學校だけがこれに無關心であつてはならぬ。やはり青年學生に政治的動きへの關心をもたせなければならぬ」といふ説が、一部に行はれてをります。併しながら、それが國內に於ける黨派的運動に學生を引きこむことになると、例へば野心ある政治家が居て、自己の政治的野心遂行に對する打算から、青年學生を利用しようとするやうな場合には、百弊あつて一利なく、本當の國家政治に對する關心は却て傷つけられます。又教育者の方が下手に政治性を持つことになると、いはゆる曲學阿世の徒が輩出し、その當時の政策に媚びてこれに追隨することのみ專念して、本當の教育は出來なくなります。

現にある國民學校の校長は、非常にヒットラーを禮讃して、同時にソヴェートを攻撃して

をりました。ところが日本がソヴェートと不可侵條約を結んだので、一體ソヴェートをよくいつてよいのか悪くいつていいのか。またドイツをよくいふことを續けてよいか、わるいかにいつて、非常に困惑したといふ話があります。教育に於ける政治性なるものがかういふでも困ります。

教育に政治性を持たしめることは、本質的に深い意味に於いては、非常に重要でありますけれども、これに反してかやうな淺い意味に於いて教育に政治性を持たすのは、有害無益のことではないかと思ひます。

併しながら今日のやうな時勢に於いては、教育に従事するものの時勢を的確に認識することは、非常に必要ではありますが、同時に困難なこともあります。私はさういふ意味に於いて、下手に教育に政治性を持たしめるのは、むしろ考へものであると思ふし、また教育者自身が下手に政治的に行動すれば、却て學生を誤らしめる結果になるのではないかと考へます。けれども現在日本の國情或は國際情勢といふものに對しては、誰もが非常な關心を持たざるを得ない。日本國民の一人としてこれを持たざるを得ないのであります。それは、政治性といふよりも、寧ろ日本の國家が現在負はされてをる「歴史的位置」について、考へなけ

ればならないと常に私は感じてをります。

この「歴史的必然」といふことも、これを後から考へて見ると、割合によく捕捉することが出来ます。學問の中で天文学が一番早く發達したといはれてゐますが、その理由は、天體が我々から遠く離れてをり、而も我々の觀察に便利であることにあります。遠くに一點の如くに望見されて而も正確に行動する諸々の星、——さういふものに對しては、人智の程度の割合に幼稚な時代に於いても、精確な觀察ができたのであります。併し日月星辰の運行に比べると、人間の活動——殊に歴史的、社會的活動といふものは非常に複雑でありまして、これを全體として捕捉することが、殊にその生成過程にある場合、非常に困難なことは、容易に首肯されることでもあります。

さういふわけで、この緊迫した國際情勢の中に立つ我國の、世界史的位置によつて生ずる「歴史的必然性」といふものを捕捉するのは、非常に困難なことであります。併し、困難だといつて我々は、それを把む努力を放棄するわけにはゆきません。

私は日本の知識階級には、さうした努力が缺けてゐたやうに思ひます。滿洲事變からこのかた、わが國にはさまざまな事件が引續いて起つてきました。けれども、かうした事件が、

世界に於いて日本の占める歴史的地位から見て、如何なる必然性をもつか。或は又如何なる意義を持つかについての反省は、殆どなされて居りません。即ち、さうした國家的事件が、十分國民によつて歴史的自覺を得てゐないといふ遺憾が多い。これは爲政者の手落にもよりますが、他面に於いては、思想や學問に従事する人々の、自分の國の逢着する歴史的事件に對する關心が薄く、その考へ方が抽象的觀念的な安易を貪るといふ傾がある、といふこともよるのであります。

我々は、今日の情勢に満足するものではありませんが、さればといつてこれに對して無關心であり得ません。どうかして我々個人の生命を國家の歴史的な生命に結びつけたい。巨大な歴史的生命の中に脈搏する一個の生命として生きたいといふ氣持は、十分持つてをります。けれどもこの歴史的必然性をしつかりと把握して、我々の往くべき道——たとひその道が荆棘の道であつても——を安んじて歩むといふやうになるのは、中々困難なことでもあります。

この困難な問題について、私が日頃漠然と考へてをることを、申上げたいと思ひます。何となれば、これが文教問題にとつても大事なことでありますし、將來の國民を教育する上にも必要なことだからであります。

その前に、一寸申上げたいことは、現在の青年學徒に對して、社會の各方面からいろいろな註文があり、また青年學徒を鞭撻する聲が非常に多いといふことであります。例へば、學生が銀座ですこし酒を飲んで酔つばらつてをると、「これはどうしたことだ。この非常時に、學生の身分で酒に酔ふなどは以ての外だ」と攻撃されます。ところが、その攻撃する當人が非常に緊張した生活をしてをるかといふと、必しもさうではありません。さういふ攻撃や註文や激勵などは、實は多過ぎる位に學生に對して與へられてをります。私達學校當事者はむしろかうした御親切に迷惑してをる有様であります。

併しさういふ人々の中に、現在のやうな緊迫した時局を、後から來る青年學徒に引き渡すといふことについて、その責任を痛感して居るものが果して幾人ありませうか。「我々は、我々として出来るだけのことをし、言ふべきことを言ひ、行ふべきことを行ひ、盡すべきことを盡し、爲すべからざることを斷乎と排斥して、而も今日のやうな困難な時局に直面した。我々は大いに努力はして來たつもりである。君たちは現在かういふ状態に置かれてゐるが、今の青年は、最小に見積つても、今後三十年位は、非常に困難な地位に立つて、國家の重荷を背負ひ、自らの道を切り開いて行かなければならない。それをしなければ日本の國運は停

頓してしまふ。諸君は我々よりも一層偉くならなければならぬ。我々より一層忠實で、かつ勇敢でなければならぬ……」と説いてこそ、感激に富む青年たちは奮ひ起つてありませう。

ところが現在のやり方は、自分があたかも完全に責任を盡したやうなことをいひ、「我々はこれほど一所懸命努力し緊張して居るのに、お前たちのだらけかたはどうだ」といつて青年を責めます。ところが青年の方では、先輩のやつて居ることをよく知つてをります。ですから、いかに先輩がお説教をしても、それがただ口先だけだといふことを感知し、むしろ反感を以てこれを迎へるやうな結果になることが、往々にしてあるのです。かうした憂ふべき傾向が、世間にはかなり多いと思はれます。壓力をもつて迫り、強制をもつて臨む時には、彼等は利口ですから、表面それに従つてをりますが、本當の氣持はさうでない場合が少なくないのであります。尤も最近では、急迫した情勢が青年の氣持を段々眞劍にしつつあります。併し我々が自分を責めずして徒らに青年を責めるといふ態度は、必ず改めなければなりません。

さて今日の時勢について、まづ誰もいふことは、今日は國家主義の時代であり、民族主義の時代である、といふ見方があります。「國家至上」あるひは「民族至上」といふ考へ方は、

著しく表面に現はれてをります。勿論民族主義、國家主義に於いても、理論的には論議すべき點がありませう。しかし現代に於いて、非常に切端つまつた國家主義や民族主義が、何故に起つたかといふ原因を考へてみますと、それは要するに、世界が狭くなつて國と國との關係が餘りに密接になつたからであります。これは誰しも常識として知つてをること、今更申上げるまでもありませんが、我々の若い時から今日に至るまでの歴史を考へても、今日に於いて國民の日常生活が、國際的な關係といかに密接に結合して居るかが判るのであります。私は去る九月十一日、ちやうどガソリン車の禁止された日に旅行から歸りまして、學校の木炭自動車を上野から學校まで走らせましたが、その時上野驛には、私の自動車より外にたつた一臺しか自動車は待つて居なかつたのです。荷物を持つた多勢の人が、車に乗れないで居る中を、私だけ自動車に乗るのは非常に心苦しく思はれました。街頭でもその朝は殆ど自動車に遭ひませんでした。これは、我々の生活に於ける一つの異變でありましたが、その原因が、全くアメリカとの關係から來てゐるのです。

日常生活への國際的反映といふものは、今日は昨日より、明日は今日よりといふ風に、犇犇と強く我々の上に迫るのであります。それは觀念的ではなく、實際的、現實的に迫つて居るのであります。かくて國際關係そのものが我々を驅つて、國家全體の團結、一國文化の獨立、あるひは國家資源の獨立といふ方向へ方向へと走らせませう。かやうに考へると、今日の國家主義といふものの背景には、非常に濃厚なる國際的關係が認められるのであります。而もこの「關係」の範圍と深度については、かつて第一次世界大戰の場合に比べて、遙かに廣く且深くなりました。我々はまづこの事實を考へねばなりません。

ヨーロッパの中世時代は、まづヨーロッパの統一された時代であり、これを大雑把に申せば、政治的勢力はローマ帝國に、精神的勢力はカトリック教會に統一されて居りましたが、この時代に十字軍といふ二百年にも互る大遠征軍のあつたことは、周知の事實であります。或る見地からすれば、この十字軍は實に無意味な戦でありました。殊に少年十字軍に至つては、徒らに悲慘を極めた感があります。この遠征によつて、實に多くの國帑を費し、無数の貴重な人命が失はれました。併し文明史家ギゾーは十字軍について、ヨーロッパをしてヨーロッパ自身を自覺させたところに、十字軍の最も重要な意義があるのだといふ風なことをいつて居ますが、これはまことに含蓄の深い言葉でございます。

この十字軍の發頭人であるカトリック教會のカトリックといふ言葉には、御承知の通り普遍的……ユニヴァーサル……といふ意味があります。中世の教會にはずるぶるいろいろな弊害はありましたが、他方に於いてはヨーロッパを一つの全體にまとめたといふ功績があります。當時のヨーロッパ人にとつては、ヨーロッパは即ち世界でありましたから、その意味に於いて、歐洲を打つて一丸としたことは、今日の全體主義が一民族、一國家だけに限られて居るのに比して、これよりは大なる全體主義であつたともいへるわけであります。併しながらローマ帝國とローマ教會とによつて統一された當時のヨーロッパは、まだ十分に分化されてはをりませんでした。

ところがルネッサンス、即ち十五六世紀から十七世紀にかけての時代になつて、ヨーロッパには民族的國家が興つてきた。また中世時代に於いては、ラテン語が學問的な言語であり、共通語でありました。この事實は、スケールこそ違へ、江戸時代の日本の學問的な文章が多く漢文で書かれたのに似てゐますが、近世になつて、ジョルダノ・ブルーノはイタリア語で、デカルトはラテン語の外にフランス語でも書きましたし、スピノザは猶太人でありましたが、同じくラテン語の外に自分の居住地のオランダ語でも書き、また中にもルターが聖書

をドイツ語に譯したといふやうに、それぞれ自國の言葉をもつて學問的な著述をする機運が起つてきました。かういふことは、中世時代では、ダンテだとか、エックハルトだとか、異數の例はありましたが、一般的にはないことでありました。其等はすべて國民的、民族的な自覺の發生を示すところの現象であります。

御承知のとほり、三十年戰爭の後にウェストファリア條約が結ばれて、ごく大體に於いて第一次世界戰爭前のヨーロッパ諸國が出来上りました。それ以來、或はフランスが中心になり、或はスペインが、或はイギリスが中心になるといふやうな變化はありましたが、要するにルネッサンス時代は、個人の自覺と共に國民的民族的自覺の起つた時代だといふことは否定できません。

勿論この時代には國際的思想も擡頭しました。國際法の父といはれたフーゴー・グロチウスの如きは、その最も著しい代表者であります。彼の國際的觀念は、大體、ローマ以來の自然法の觀念を基礎とするものであります。自然法とは「自然的すなはち理性的」といふ考に基づきました所の「理性法」であります。理性法——すなはち普遍的にして理想的な「法」が、國際法の基礎として考へられたのであります。従つて當時における國際的といふ

考は、どうしても抽象的觀念的たるを免れませんでした。

近世の初め以來、國家的國民的自覺が起ると共に、國際間の關係は一層多事になりました。國際關係が多事となるにつれて國家的對立もまた烈しくなりました。第一次世界大戰も亦かうした事情の下に起りました。

近世になつてから、西力は次第に東漸いたしまして、國際關係は西洋から東洋に及びました。また一方では、同じ西洋の中でもヨーロッパとアメリカとの關係が新たに生じて來る等、國際關係は次第に廣汎になつてまいりました。さうして、苟も世界に國するものは、一國として他の國々の存在を意識せずには、生きてゆかれぬやうになつて來ました。

國際關係は、かやうに地域を廣くすると同時に、世界は狭くなりまして、人間の慾望は大きくなり、國民生活はますます複雑多岐に互るに至りましたが、従つてその深さと濃さと險しさに於いても、昔日の比ではなくなつたのであります。つまり、國家と國家との依存關係がより密接になつたといふ事情が、他面に國々の生存を脅かす機會を多からしめ、その結果として國家的生存への主張を尖鋭化するやうになつたわけであります。

前の歐洲大戰の時にも、その影響は無論アジアにも及びましたが、當時の日本の位置はま

だ暢氣なものであります。ところが今日は、アジアの問題は直ちに歐米に及び、日本の一舉一動が世界を動かすと共に、世界の出來事が皆日本に直接影響することになり、その間に處するわが國の位置の重大と共に、困難も亦加はつて來たことは、御承知の通りであります。西洋人にとつては、西洋即ち世界でありました。東洋といふ地域は、彼等にとつては歴史の初歩的道程であり、さうして現實には彼等の植民地でありました。自分たちの巨大な資本をおろして自分たちの生活を肥やす舞臺と心得てゐたのであります。ですから、西洋と東洋との國際的關係は、さういふ意味に於いて對等の關係ではありませんでした。その間に日本が居て、不十分ではありますが、次第にかうした對等の國際關係を拓いてきたのです。さうして今度の世界戰爭は、日本をいよいよこの國際關係の深みに引っぱりこんだのであります。

これを持ちこたへ、これを突破するかどうかによつて、日本が世界史の舞臺に、主役として上るかどうか、といふことが定まります。世界史にとりましては、東洋と西洋とが、昔のやうに疎遠な關係でなく、また近世に於ける如き東洋の西洋に對する隸屬關係でもなく、兩洋が互に交渉し互に刺戟し合ふといふ端緒を開くかどうか——この轉機を決定するものが今

度の事件だとは、萬人の悉く考へる所であります。

今や世界のすべての國々は、イデオロギーはとにかくとして、皆自國の存立のために血みどろの戦を戦つてをります。我國もまたその一つでありますが、併し我國がさういふ存亡と興廢との轉機に立つといふことが、同時に世界史の上にこれほどの重大な意味を持つてゐることを、我々はしつかりと自覺しなければならぬのであります。

昔の國家は、アトミステック（原子的）な存在でありました。ところが今日の國家は、さういふ孤立的な存在は許されないので、ブロックを形成するに至つたのだといふ人があります。これもある程度まで首肯し得ることでありませう。現にアングロ・サクソンの英、米、カナダ、濠洲等は、前日の分散状態をもとの一つに歸さうとするやうな有様になりました。かういふブロックが、果して將來に於ける國際的協同のジャームとなり得るかどうか。それはまだ判りませんが、併しその理由が經濟的であるにしても軍事的であるにしても、これは自分の生存を主張する爲に、まづ他の盟約國の力に依存することを考へる——つまりその依存關係を前提として、自國の生存を主張するといふ意味が含まれて居ります。かういふ事情は、我國の場合に於いても著しく見られることでありまして、東亞の新秩序とか、日滿支ブロック

クとかが唱へられる所以も亦、そこに在ると申されませう。

我國は過去に於いては、四面環海の國として國際的孤立を享受するといふ、無事と幸福とを保ち得たのであります。現代の日本は、もう東洋の君子國として孤立した生存を續けることは許されなくなりました。一方では、東洋を新たに世界史的舞臺に乗り出させるかひつこめるかといふ轉機に直面しながら、他方には、東亞のブロックの中心として、これを率ゐて立つといふ重荷を負はされてをります。而も我々日本人は、さういふ重大な立場に臨むべき用意を十分計畫的にやつて來たかといふと、決してさうではありません。またさういふ歴史的政治的敎育を受けて、十分な自覺を促されて居たかといふと、實はその自覺すら十分に與へられなかつたのであります。

この「不用意」について考へます時、これはやはり日本人が大陸から離れて住み、外國から孤立して生活して來た時代の習慣を、脱却しきれない所から出てゐるものと思はれます。滿洲事變以來、大陸では幾多の事件が重なり重なつてめまぐるしいばかりに起つてきました。けれども國民は、これを自分の頭上の問題として切實に感ずることがどうも少なかつたのであります。而もそれが爲に國家の興亡を賭し、多大の國帑を費して、何百萬といふ我々の子

弟を、擧げて皇國のために捧げて居るのであります。

さて次に、この大陸に對する一般の無關心といふことに關聯して、民族問題について一言申し上げたいと存じます。

御承知のとほり、ヒットラーの『我が闘争』には、民族主義が強く叫ばれて居りますし、またドイツのいろいろな學者がこれを主張して居ります。……尤も私が最近讀みましたのは、ローゼンベルクの『二十世紀の神話』ぐらゐのものでありますが、その中でローゼンベルクは、民族の精神的起源を神話に求めて居ります。神話の中に民族のすべての發展の萌芽をみとめ、その國民に獨特な本質を力説すると共に、國民的英雄を尊崇しまして、ここに民族の一つの體型を主張してをるのであります。これを要するに、民族主義の唱へる第一のものは、民族の純粹性であります。それがために異民族の排斥、異民族との混淆の排斥が主張せられます。ドイツに於けるユダヤ人排斥がその一つの現はれであることは、既に御承知の通りであります。ユダヤ人排斥が、ドイツの現實に深い原因を有することは、我々の想像以上のものがあります。これを抽象的な人道主義だけがかたづけ得ない點も多々あると信じます。併し一般的にいへば、これも亦國家に於ける國際關係の過多の生んだ現象の一つに相違あり

ません。さうして頼れかかつた國家國民の統一のために、まづ民族の純粹を保たうとするとは、これはたしかに一つの適切な政治的處置といつてよろしからうと思ひます。けれども、その第二段には、かくして純化された民族が中心となつて他の國々に働きかけるといふ階段が、必然的に生じて來ます。ドイツに於いても、オーストリアの併合だとか、ズーデンテン地方の合邦だとか、ダンチヒ廻廊の要求だとかは、民族と國家とを一致せしめるといふ理想から、已むを得ないと認めても、さらにそれ以上に出て、異民族を支配下に置いたり、異民族と同盟協力したりするといふことになつた時、民族の純粹性を主張し、同民族の結合と、親縁のある民族との協同を主張する民族主義は、どうなつて行くか。——この問題はなかなか現實の状態と理想通りには一致しないことが多いやうであります。

現にドイツのやつてゐる處をみても、その反對に出てゐるやうな姿であります。併しアンドロ・サクソンのブロックを形成する所以が、やはり「血は水よりも濃い」といふことに大きな理由をもつてゐることを考へると、我々は單に現實と一致しないといふ理由によつて、民族主義を無視するわけには行きません。何れにしても、異民族を如何に支配するかといふ問題について、異民族との交渉を或る形で拒絶した民族主義が、その次の新たな問題に當

面することは、争へないのであります。この問題はこの位にして置きますが、私がここにこの問題を出したのは、大陸に於ける日本發展の起點として、朝鮮問題への國民の無關心について、一言申し上げたいからであります。

民族問題、民族問題といひますが、我國に於いては從來それは問題にならなかつたのであります。大和民族といふ言葉は使はれましたが、我國は他國から隔絶した地位にあつた爲、外國からの脅威を受けることも少なく、異民族の流入もありましたが、國民の安靜を破る程度ではなかつたのであります。かくして外來の異民族は少しづつ同化されて、いつの間にか日本民族になつてしまつた。様々の異民族を容れながらも、二千六百年の長い歴史を経て日本民族が出来上つたのであります。我國は民族問題が問題にならぬ程に幸福な位置を與へられたわけであります。ヨーロッパの如く、國と國とが境を接し、政治的にも文化的にも人種的にも互に侵され易い状態では、どうしてもこの問題が起らずには居られません。その點我國は大にこれと相違して居ます。

ところが明治の末に朝鮮が併合されました。これに依つて初めて我々は民族問題に逢着したといつてもいいのであります。私は朝鮮に十五年ほど居りました關係上、自然、朝鮮に關

心を持たざるを得なくなりました。御承知の通り朝鮮は昔から、いはば神代から日本と交渉が多く、又人種的にも非常に關係の濃厚な國であります。併し過去に於ける歴史的交渉の濃厚は、必しも兩國を親しくするばかりでなく、又相争はしめしたのであります。この歴史的關係の深さを説いて、「それだから、日本と朝鮮との併合は歴史的必然性に基くものである。かくあるべきことが實現されたのだ」といふやうに日本人の方では説くが、それだけで朝鮮人を納得させることは六かしいのであります。過去の歴史を説くことに依つて、いはゆる内鮮一體を直ぐ實現させるのはなかなか困難なことであります。我々は現實の努力を更に重ねてゆかねばなりません。この點に於いて既に我國民となつた朝鮮人に對する國民の關心の稀薄を、切に感ずるのであります。

地圖を見ても、朝鮮は全く文字通り我々の前に投げられたもの、即ちプロブレムであります。或る人は、若し他國民が朝鮮に勢力を得れば、これはまさしく日本の脇腹に槍を向けたやうなものだといひました。これは直ぐに同意されることであります。滿洲事變以來、鮮人の反抗運動は表面から消え、その富は殖えて來て、高等教育を受ける者も益々多くなり、半島人自身が自分の力を自覺するやうになつて居ります。妙な話であります。朝鮮の李朝陶

器だとか高麗焼だとかいふものも、以前は朝鮮に居る内地人ばかりが珍重して、随分安い値段で逸品を買ひ得たのでありました。ところが、最近では半島人がさういふ品を非常に高く買ふやうになり、賣立があつても半島人が最高の値段で買ふことになつて、内地の所藏家も、態々半島に來て半島人を目あてに、朝鮮の骨董を賣るといふ有様になりました。

かやうに半島人の教育が進んで來、且又半島人の富も殖えて來ましたことは、たしかに總督政治の功績と申さねばなりません。併しながら、それと同時に、總督政治も日本人全體も、ここに新たな困難を克服すべき階段に置かれたのであります。

この半島人の發展に應じまして、内地人の發展がそれ以上に大きくならなければ、つまりあらゆる意味に於いて、内地人が十分に半島人の兄でなければ、「内鮮一體」といふことは中々保持しにくくなつてまいりました。併し、さういふことを切實に考へてゐる日本人が、果してどの位ありませうか。ここに民族問題をとつていへば、この問題はこれから始まるといつてよろしいでありませう。殊に日本の方針が、内鮮一體といふ公明正大なものであります爲に、それは一層困難な仕事であることを覺悟せねばなりません。

手近の朝鮮が既にさういふ状態にあります。いま我國は滿洲、北支、中南支にまで手をひ

ろげて、地域的には我國の活動はむやみに擴がつてゆく。さうして、この客觀的狀態に應ずる主體的態度は、一向に出來てゐないといふ有様であります。この根本的事態が、我國の今日の思想界、教育界に於けるさまざまの悩みを生むものでありまして、實を申しますと、私もこの悩みを抱いて時々憂鬱になるのであります。

これは、一面には日本人の多くが、大陸に於ける國家の存亡を賭しての行動に對して無關心であること——殊に知識階級の利己的獨善的な無關心、従つて國民一般が、さうした日本の政治的もしくは歴史的的位置に對して無理解であり、又は理解が乏しいことによるものといへるでありませうし、また一面では、爲政者の態度にも熱と力と慎重さが足りなかつたことに基づくものでありませう。

青年學徒に就いて申しますと、日露戰役以後、自分の生活に沈潜するといふ個人的な内面的な傾向が支配したのが、第一次世界戰爭以來、共產主義の流行によつて、一時に青年學徒の關心が社會問題、經濟問題に傾注されました。而もそれが、青年らしい理想主義的な點を持つと共に、非常に深刻に現實といふものに觸れて居るつもりで居ながら、實は抽象的、觀念的に流れて居たのであります。その後青年學徒の氣持は又もや、社會からだんだん遊離し

て來ました。同時に一方で社會の状態はますます世智がらくなつて來ました。そのために青年たちは、次第に社會的拘束を苦痛に感ずることが多くなり、その結果、自己の享樂に走つたり、自分の功利にのみ意欲を用ひるやうになり、わるい意味に於ける個人主義的傾向を馴致したといふ事實は否定されません。併しかういふ今日の危局に當りましては、「誰それが不都合だから、おら知らん」といふやうに、責任を他に轉嫁して自分の怠慢を是認することは許されません。時局はいよいよ切迫して來、青年の已むに已まれぬ感激は日一日と高まつては來てをります。併し若し青年に號令するものが、國家の名の下に私利を營んだり、自己の權勢欲を充たさうとしたりすることが、萬一にもありましたならば、それは竟に青年の信服をかち得ないであります。

以上いろいろと申しましたが、結局、私が「現在の教育の持つ政治性」と考へてゐるものを申し上げた次第であります。それは、我國が直面してをります客觀狀勢の廣大なこと、多端なこと、そして困難なことに對して、それに即應する國民の主體的態勢が十分に出來てゐない。そこに教育の、或は教育者の深い苦惱がありますから、この客觀狀勢の認識と主體的態勢の充實とこそ、日本國民の努力の標的でありまして、同時に教育上の目標たるべきものでございます。

この時局の突破も將來の方針も、そこから出てくるべきものと信じてをります。長い間の御靜聽を感謝いたします。(昭和十六年十月二日、交詢社にて講演)

附記 講演筆記を見てゐるうちに、不満の箇處續出して、ほとんど全部訂正しました。話の内容とは、大分違つて居ることをおことわりして置きます。

初めて協力會議に出席して

私は豫め期待もあきらめも用意しないで會議に臨んだ。十六日午前中は總裁、議長、事務總長の挨拶や説明と、事務局、組織局兩局長の説明とがあつたが、前者は夫々誠に立派な内容であるが、原稿の朗讀であつて、潑刺と人に迫るものは少なく、後者は事務的説明であるが、固より他奇もなかつた。

かういふ劃期的會議に際會して日本に於ける雄辯の乏しさを痛感した。かういふ時に原稿朗讀といふ安全な方法が取られるのは、國民の中に片言隻句を捉へて不敬や不都合呼ばはりする者を恐れることも、一理由であらうが、多少の瑕瑾はあつても熱あり力あり雄大奔放な宣言が望ましく。

午後の太田、小畑兩局長の説明は、遙かに簡明率直であると共に重點があり、平板を免れ

得た。殊に小畑氏のは論旨は別としてはつきりして熱があつた。

會議員の話は、十六七兩日共、特に農村や中商工業者に關する具體的な話に耳傾けられた。かういふ話を聴くと、新聞などで見てゐる問題が更に實感的に訴へられて來る。かういふ地方の人々は中々雄辯であり、かつ用意も十分と見えて論旨も透つて居、態度の眞剣なのに感心した。ただ大きな缺點は、限られた時間の話に序文や跋があり、問題の中心を把んで簡明に力強く述べるといふ修練が足りないことである。

十七日には、津田信吾氏の所謂皇道經濟なるものと小畑氏の企畫經濟との鉢合せがあつた。家族會議はなごやかであるべきだが、また腹に一物を残しつつ妥協してはいけない。こんな癖りは、更に徹底的な論争と反省とを経ることによつて朗かにしなければならぬ。

實踐要綱は全體としてりきみが目立ち、形容詞が多きに過ぐる。慾をいへばそこに五箇條の御誓文にあるやうな闕達にして雄大な氣象が欲しかつた。

この翼賛會幹部が、小畑氏のいつたやうに縁の下の力持を任じて、本當にその口にする減私奉公の實踐を行じ、近衛公が嚴に自家の薄志弱行を戒めて永く内閣に止まり、偏に盡瘁の誠を捧げんことを切念する。(昭和十五年十二月十九日)

教育者の反省

今日の學生は無氣力だ、情熱に乏しい、勇氣がない、だめだ、などといった聲を耳邊に聞くことが多い。だが私は必しもさうだとは思はない。

いつの時代にしても、元來青年は情熱の持主であるべきはずである。それがさういかないといふのには、深い原因がなければならぬ。それはただ青年そのものの罪のみでなく、その前代に居る父兄の責にも歸せられる。私は今日の青年をその意味で氣の毒にも思ふが、彼等に對して大なる希望を持つことを、決して止めはしない。

青年學生を非難する者よ。その非難は却て君等の面上に返さるべきものでないか否かを反省せよ。君等は果してその負ふべき指導の責を果すに忠であつたか。今日の日本の最大の病弊が、國民の各々がその責任を解せざるに存することを、私は痛切に考へざるを得ない。責

を知るものは、腹を切るべき時には切らねばならぬ。部下を犠牲にして涼しい顔をしてゐるわけには行かないはずである。さういふ武士道的精神は、戦地は別にして國內ではむしろ衰へてゐるのではあるまいか。かういふ風なだらしなさを犯しながら、自己の負ふべき責任を悉く次代に轉嫁して、これを青年學生の罪に歸するといふことは、果して許さるべきであるか。

その時代の先輩が責任と勇氣とを十分に持つてゐるのに、その青年が無氣力である時にして初めて、君たちは聲を大にして青年を責め得る資格を獲得するのではないか。否、かかる場合青年が無氣力であるといふのは、殆どあり得べからざることである。

青年學生が進路に迷つて懷疑的になり、動もすれば一時の享樂に走らうとしたり、又はその持前の情熱を以て道理を主張する力やこれを貫行する力を失つたり、するく批判的になつて馬鹿正直を嘲笑したりする弊は、たしかに現代に多く存する。これは憂ふべく悲しむべきことであつて、一日も早くこれを除かねばならぬ。

しかしその最も根本的な方策は、君たちがその責の一半を負ふべきことを自覺し、更にその良心に基づいた行動を青年學生の上に加ふるにあるのではないか。

實に今日程、教育者に痛烈な自己反省と自己批判と、又これに基づく行動の必要とせられる時機はない。さうして教育者、殊に普通教育に従事せる教育者が、極めて繁多な行事を課せられて、自家の實力、従つては生徒の實力を培養する餘裕を與へられず、疲れてゐる實情に對しては、當局が彼等の立場をも考へて、かういふ行事の形式、見てくれだけを強ふるに止まらず、進んで適切なる急所を把んで彼等に活を入れ、この行事を簡勁にすると共に、内から力の籠つたものとする必要がある。

固より教育者、殊に高等専門の教育に従事する我々が、嚴に偷安姑息を戒めて學生と共に歩み共に勵むといふ決心が、何より必要なるはいふまでもない。

だが、學問を教へる人は、常に學問を研究してゐなければならぬ。それでなくては眞に學を究め知を愛する心を、學生に植ゑつけることは出来ない。彼等の學問と勉強とにかこつけての懈怠は責めても、徒らに外見の景氣を見ただけで、彼等の勤惰を「償すべきでない」とも亦勿論である。

さうして學生の眞の元氣は、やはり眞劍なる學徒たる此等の教育者によつて鼓舞せられるといふ一面を、閑却してはならない。

今の學生の無氣力の重太な原因の一つは、彼等を小學時代から苦しめ來つた入學試験にもある。これまでの教育のやりかたは、大體に於いて自由主義的であつた。自由主義が一がいになるのでは決してないが、自由主義が陥り易い弊は全體主義が陥り易い弊と共にある。即ち教育がその根柢に存する嚴しさを忘れて、被教育者の御機嫌を伺ひ、そのお氣に召す時を見はからつて、やはらかい召上りものを差上げるといふ弊があつた。これは出来るだけ誇張していつて見たのだが、かうした教育は被教育者の自發的精神を重んずる積りで、教育が一面鉗鎚と鍛鍊とを必要とすることを忘れ、努めて硬教育を避けて軟教育に就かうとした。しかも他面子供の立身出世のため、または學業成就のためには、どうしても入學試験に合格しなければならぬ。

ここに於いてか、一面に甘やかし、他面に強壓が子供の上加へられ、子供は好かぬ食物を多量に詰め込むことを餘儀なくされて、その自發的精神は萎び、その肉體は消耗するといふことになりがちである。

兎に角かうした矛盾になるだけ苦しまぬやうな境涯に子供を置くことを、我々は子供のために工夫してやらねばならぬ。入學試験の方法としては、むしろ平凡な學科試験を難少なき

ものとしたい。試験の方針を猫の目のやうに變へることは、なかんづく最も多く子供を昏迷せしめる効果がある。

話は本題から離れた感じがあるが、新體制といつても本來の精神に歸ることである。更新は同時に復古である。ただその本來の精神の潑刺として動いて止まざる生命を捕捉し得るならば、その復古なるものが徒らに祖先の範域に止まらずして、進んで現實の生ける事態に即應すべきを知るであらう。教育者は徒らに事功を急いではならない。形式の整備や統一で安心してはならない。厳しく自己を反省すると共に青年學生の心を解することを努め、彼等の自發的精神の躍動を促すと共に、それを全體に結合しなければならぬ。

それと共に統制なるものが、本來、本質を等しうして個性を異にするものに對して初めて意義をなし、個性のない奴隸や家畜に對してはそれほど意義のないことを思はねばならない。

今や時勢の切迫は日一日にその深刻の度を増しつつある。この時に當つては身に刺された毒矢の、どこから、誰から、その毒の性質が何かを論ずるよりは、先づその矢を抜くことを喫緊とすることはいふまでもない。

しかし今日の時局なるものは、固より世界と我國との置かれた歴史的必然によつて生れたといへ、一國人の責を負ふべきものが、その責の重大を忘れて、徒らに國民の尻を敲けばいいと考へてゐたら、これは由々しい大事である。

彼等まづ身命を君國に捧げる決意を成して、それを如實にその行藏に發揮するにあらずんば、新體制新體制の聲も竟に徒らなる一時の呼號に終るかも知れぬことを、彼等自身先づ覺悟せねばなるまい。

かういふ時勢に對しては、青年學徒も固より無關心ではあり得ないが、しかし彼等の勉強と修練とを拋棄して、徒らに巷塵の間に盲動せしめるやうなことがあれば、それはまた當局者の恥辱である。

今や野心あるものは、動もすれば自家の權勢と利益とのために、青年學生層を動かさうとする傾なしとしない。青年學生には彼等のほんものであるか、又はにせものであるかを見分ける眼力を具へさせなければなるまい。

全體を動かさんとする者が、自己の利慾や自己の主觀的な粗笨なイデオロギーによつてこれを遂げんとするならば、危険はこれより大なるはなく、皇國の統制を破る者は先づ彼等で

なければならぬ。(昭和十五年十月二十二日)

教育者の尊重

教育者に對して近頃頻りに非難や激勵の言葉が浴せられる。併し昂然としてさういふ言葉を口にする連中が、若し今の教育者に代つて教育をやつたとしたならば、果して直ぐに教育が革まり、學生や青年に活がはいるかといへば、それは大きな疑問である。第一に彼等は教育の困難といふことを、従つて教育の重大といふことを十分に自覺してゐない。それは、若し彼等がそれを自覺してゐたとすれば、恐らくは吐けまいと思ふやうな事を、實に容易に得意らしく發言してゐる彼等の態度が、このことを裏切つてゐるからである。イタリヤやドイツの獨裁國家が我國に影響を與へて以來、著しく氣づくことは、粗末でも何でもイデオロギイを掲げて、それを力を以て強制すれば、直ちに萬事が革まるやうに思ふ考へ方である。併し世の中に獨裁者ほど困難な資格の要求せられるものはない。ヒットラーにしてもムソリー

ニにしても、その力は彼等の百難を凌いで闘ひ取つたものである。さうしてその力を用ふるに當つて、どんなに慎重であるかは、例へばイタリヤが参戦するまでの、あの汚いと思はれるくらゐ辛抱強い立ちかたにも窺ひ得られる。私は教育を革める者が、外の場合に於ける如く教育の素人であることを否定しない。併しここにいふ教育の素人とは、玄人らしい因襲から脱却して、教育をその本來の姿に於いて捉へる人であつて、今の多くの外からの教育改革論者の如く、本當の教育的精神に乏しい、教育に就いて考へることのないやうな人であつてはならない。

教育者に對しては兎角勝手な批判や非難が行はれるのは、教育が萬人の關心事たるにもあるが、教育者が權力を持たず、何をいつても壓迫が身に及ぶ恐れが少ないといふ事もあらう。併し教育がかうした教育當事者以外の勝手な註文によつて、その自主性を失ふ傾きのあることは歎かずに居られない。固より教育の自主性がその孤立性でないことは、なほ自主的外交の孤立的外交であるべきでないのと等しい。教育が國柄や國民性に基づくはいふもさらなり、殊に今日のやうな時勢に於いて、その現實の認識に出發して革められるべきことはいふまでもない。併しこの現實の認識なるものも亦、結局は教育本來の精神の自覺と活動とを促す

ものとして、初めて意義を得來るのであり、換言すれば現實の認識による革新によつて發揮せられるものは、變らざる教育本來の精神に外ならないのである。これは總じて革新なるものが本來の精神と生命とに歸る意味に於ける復古である、といふことの一つの場合に外ならない。

教育者は周圍の情勢をも見、批評をも非難をも聽くべきである。併しその自主的態勢を失つてはならず、周圍も亦これを失ふことを望んだり強ひたりしてはならない。ところが弱き者は即ち教育者であつて、殊に普通教育、國民教育に従事する者に於いて然りである。國民の鍛鍊を志す色々な行事の如きも、それが煩細に流れたり、形式に墮したりして、十分に單純化され強化されない爲に、徒らに教育者を疲らせ、従つて被教育者に與へる弾力性を減殺させてゐる弊も十分にある。

教育と教育者との自主性を尊重するのだけならば、本當の教育は出來つこない。何から何まで煩細な規定を設けて、教育者の工夫と創造との餘地を残さないことは、教育を殺すものである。例へば高等の學校に於いて内外の古典を教授する場合の如き、検査者の檢定した限られた選擇を絶對の標準とする如き、果して教育者を尊重し教育を生かす道であらうか。古

典の精神は全體にある。その中の暗所とか缺點とかも、これを歴史的の見地から生かせる所もあり、又それは山あれば谷がなければ如くに、全體の不可缺的要素をなしてゐることもある。さういふ點を何故に教育者の批判に任すことが出来ないであらうか。教育の方針は、その全體精神を把んでそれを簡勁に指令し、末梢的な重箱の隅をつつくやうなことは、むしろ避けるべきではないか。さういふ點については、教育者自身疑ひも苦しきも尋ねもして、教育者としての體驗の中から具體的な信念を掘り出すべきではないであらうか。教育者を叱るのも勵ますのも罵るのもよい。ただ教育者を尊重することを忘れて教育の革新は望まれるものではない。教育者を鞭撻するものが自分の權力、財力、學力に自惚れてゐるばかりで、教育の精神に對する理解と尊重とのない者であつたらば、それは竟に教育革新の功を擧げることは出来ない。抑々鞭撻といふ詞にしてからが、自分が相手に對して謙遜していふ詞であり、誰人もむやみに他人を鞭撻する資格や權力のあるものでない。教育を論ずる人の反省を求める所以である。

時感

新體制といつても一面に於いて復古である。これは明治維新が王政復古であり、西洋近世の初頭に於ける革新運動であつた文藝復興、宗教改革が、共に西洋文化の淵源なる古代へ、又基督の精神への復古運動であつたことから、直ちに首肯される。併しこの復古が同時に革新である所以は、過去の或る特殊の時代の歴史的事實を固定的に絶對化して、萬事をそれに則らしめるといふ膠着的態度とは、凡そ兩立し得ざるものである。かういふ態度は更新と進歩とを妨害する以外の何者でもない。現實の時局の困難が、我々を驅つて人間の、又日本國民の本來、本質に生ける動けるいのちとたましひとを求めしめるのが、即ち復古の意義である。

この生きた動ける姿に於いて本來の精神を摺むのでなければ、それは革新とも發展ともな

りやうはない。この心懸なしに復古的イデオロギーを叡山の山法師が日吉の神輿をかついだやうに振りかざすのは、古を弄ぶことになつて、古によつて今を生かし、今によつて古を生かすことにはならない。

革新と復古とが必然的關係を有することを思ふにつけても、現代のこの缺陷が現實の認識の正しく深くないこと、古代の見方の固定的抽象的なこと、換言すれば歴史的認識がそのあるべきが如く現代の認識と生きた關聯にないことに存するを思ふのである。今の日本が開關以來最大といつてもよい難局に面せることは、日本國民の誰しもが感じて居ることである。さうして固よりその實狀の一々が國民に知らされるべきものではないが、その大體の成行が適當に又愷切に國民に告知されず、それが歪曲されたり、威嚇的な形を取つたり、流言蜚語になつたりして、國民に傳へられる爲に、國民の眞面目な努力を沮喪させたりおびえさせたりして、國難の中に希望を抱いてそれを凌いで行く力を妨げることがないかを惧れる者である。

言論の束縛も今日の時勢では止むを得ぬ點があるけれども、その取締が大所を捉へて煩細に流れぬことと、國民の愛國的な善き意圖を殺さないことを切望したい。

最も深く希望することは、現在日本國家の推進力の中心たる人々が、一方に積極的な確信を強く把持して國民を指導すると共に、他方には何事も國民と共にする精神を忘れず、自戒と反省とを絶えず自分たちの心事と行動とに加へんことである。かういふ権力と金力とを持つ人々の陥り易い弊は、それを悪用して私に流れることである。國家の興廢は固より國民全體の氣力と意志とによるが、それを左右するものが又彼等有力者であることを思ふ時、彼等の自戒自重を切望せずには居られない。

平沼内相の談に、全體主義は永續的なものでない、といふことがあつたが、その點だけについては私も同じ意見を發表したことがあつた。全體主義の本質は國民全體の力を集めるといふことと、この全體に強い中心力があるといふこととである。後者が即ち全體主義と獨裁政治とを結びつける所以である。前者にしても國民の意志が重大な國民的課題に集中されて單純化され強化されるのでなければ困難である。

やはり平沼内相が首相時代にいはれたやうに、我國は皇室を中心として國民が各々その所得、盡忠報國を勵むことを以て常道とすべきであらう。併しそれにしても國に強い中心政治力があつて、それが國民全體に滲みわたることは不可缺であり、その爲には第一にこの中

心政治力となつて大政に參する組織及び人間に、全體的な包容力があつて、國民を除外し拒斥しないことが必要であり、第二にはこの包容し得た國民の意志を集結して實行する強い意志と、やはり組織とが必要である。

それと同時に國民がその所を得て奉公の誠を盡すといふことは、國民が全體に對する關聯を自覺して、自分の意志と行動とを全體の意志と行動とに捧げるといふことである。日本の國柄では國民は權利をいふべきでないといふ詞も、當局者に困難も利福も等しく國民と共にする心懸がなければ、國民に上からの要求のみを課して下からの要望を壓服する口實とならないこともない。忠良なる國民の從順を惡用することのないことを、切に切に現代の中心推進力たる諸君に向つて希求せざるを得ない。(昭和十六年一月六日)

對米英戰に臨みて

この事態の當然來るべきことは、日米の主張の距離の大きさから考へて、かねてから懼れてゐた處である。萬一戰爭状態にまで到らなくとも、この度の談判に依つて兩國の間に永久的平和がやつて來るとは、到底考へられないことを思へば、今日の事態はむしろ必然的な經過であり、我々は野村來栖兩大使に對し、その苦しい努力には全く萬腔の同情を表する者である。

従つて徒らに一時的に興奮して疲れることのないやうにしなければならぬ。この際最も望ましい態度は、國民全部が平常心を以て非常時に沈着に活潑に順應して行く工夫をすることである。

私は學校の生徒に對しても、出來るだけ心を落ち着け、不斷と變らぬ心を持してやつて行

くこと、そして十分に且忠實に果すべきことを果して行くと同時に、念頭には常に今日の未曾有の非常事態に即應する捨身の覺悟を持って貰ひたいと思ふ。

これを要するに、緊張が末梢的にならないで、エネルギーを本當に肝要な點に集中するといふ難事が、切實に要求されなければならないのである。

最後に當局に要望することは、本氣になつて本當のことを國民の前に示す事である。この有史以來未曾有の國難を、國民と共に青年と共に擔つて行く覺悟の下に、正直に本當のことを言はねば、國民をも青年をも率ゐて行くことは出来ないからである。

(昭和十六年十二月九日)

ねぢ

舊臘一高時代の寄宿舎で同じ部屋だつた一人の舊友から、自分の製作所を見に来てくれといふ電話をもらつた。この友人は、その當時の二部(大學で理工科へ行く部類)の生徒として、部屋中で最大の勉強家であつたと同時に、又のびのびと素直に育つて暗い處のない青年であつた。この頃久しく相見なかつたといふこともあり、私は喜んでその招きに應じた。職工を合せて百四五十人の小ざつぱりした工場である。製品はねぢ一式であつて、大きなものも小さいものもある。このねぢを理想的に仕上げるために、彼は十七八年の歳月を要したといふ。一定の標準を掲げて、それに達しない中は市中に出さなかつたといふ。外國から機械を買つて來ても、それを實用的に動かすまでには、幾多の工夫や月日を要したこともあつたし、それに倣つて實際に役だつ器械を構成する苦心も、中々大したものであつたらしい。私

のやうな素人には、細かなことは分らないが、普通の工場で出来るねぢを顕微鏡下に照らし
て見ると、そのギザギザの峰々が實に妙義山の如くゴツゴツとして、全體が悉く不揃ひであ
るのに、この製品は峰の斜面も谷の底も實にキチンとしてゐて、見るからに確なものであ
る。かういふ製品を作り上げるには、よき協力者もあり、又忠實にして獻身的な、仕事好き
で獨創的な職工の力が、與かつて最も大きかつたであらう。併し私が工場主の舊友に感服す
ることは、彼が専ら仕事をねぢに限つたその集中と、一定の理想に達しなければそれを世間
に賣り出さなかつたといふその良心とである。これは中々出來にくいことで、それを後顧の
憂なき彼の境遇に歸する人もあらうが、さういふ條件に缺けなかつた人が、決して悉くこれ
をよくし得るわけではないことは、明かである。又かういふ工場が決して珍らしくはなく、
世間にさらにあるといふ人があらば、私はそのことを以て日本の慶事となし、大にこれを希
望する。

全體主義は固より國民が何もかもをやることではない。これは海軍の大勝の原因が、その
自分のことに専らであつたといふ一事によつても分る。國民が全體を動かし全體を組織する
部局を擔當することが最も肝要である。それにしても「たしかねぢ」、これは何といふ意味

多い詞であらう。國民がたしかねぢになることが、國家全體の活動力を確かにし強くする
唯一の道であることを、國民は今一度考へ直してよからう。(昭和十七年二月四日)

國民素質の向上

日本國民の文化的素質の向上は、第一には優れた文化を造る力を、第二には文化的價値を識別する力を養ふことによつて達せられる。第一については、國民の持つてゐるさうした力を集めてこれを發揮せしめる統制が必要である。併しこの統制は適當な分化を妨げずしてこれを助長する如きものでなければならぬ。各々の職域や専門研究をしてその所に安んじて集中の力を盡すことを得しめるとともに、無用な重複を避け、その局部が有機的全體を形成するやうにしなければならない。

一たい大學の理想は上にいつたやうな學問的組織體系を形造るにあるのであるが、今日の大學はこの理想の實現に遠く、この理想を實現する熱意にも乏しい。大學の各學部の間如何等の有機的連絡もなく、さうかといつて専門的の集中が出来てゐるのではなくて、却て割據

の勢が多いといふ有様である。つまり専門的研究がその屬する全體的地盤に關聯してその局所を深く穿つといふことが乏しい。このことは獨り學問ばかりでなく廣く日本の文化的諸領域に共通な弊害であり、この點が改められないと、日本の文化の高い向上と長い發展とは望まれない。

現代の日本はその置かれた重大時局に迫られて、即時の必要に應ずるを餘儀なくされてゐる。「必要は發明の母なり」といふ詞もあり、この切迫した必要が學問的文化的な發展を促す機會となることを認めると共に、又それが徒らに國民をあせらせて、その創造力を阻礙する恐れも十分あるし、その場限りの間に合せを事とする弊害も十分にある。基礎的なものをしてそのあるべきが如くに枝葉を茂る力たらしめ、現實眼前の必要の打開が同時に長き國民の文化力となるためには、やはり優れた指導者が必要である。

それと共に統制が、國民個々の個性的な創造力を萎縮せしめたり消滅せしめたりすることになくて、寧ろそれを助長してその居るべき所に居り、行くべき所に赴かしめるにあることを忘れたくない。

文化の向上に最も必要なのは、學問の振興であるが、この頃注意すべき一つの現象は、前

にいつた國家當面の必要といふことから、學問に軌範的傾向を強化せんとする風潮である。これは他面に實踐を重んずる主張と相伴へるものであつて、學問知識を現實に即應してこれを生活化せんとする所に、正當且つ重大な意義を有するものではあるが、ただその軌範の基礎が粗笨で空威張に過ぎない場合には、眞の認識を誤り、價値の鑑別を亂し、現代に於いて最も必要とせられる科學的知識の發展を壅塞するに至るであらう。

大東亞指導者となつてその新秩序を立てるべき任務が、現實に日本國民に課せられた今日、日本國民の文化的向上の要望せられることは、固よりいふまでもないが、それには日本の昔からの文化的所産の型を、外國文化に對してただ抵抗的に守らうとするやうな消極的態度ではだめである。

私はその點に於いて「文藝春秋」三月號に出た鈴木大拙氏の論文「東洋的一」に多大な同感を覺えた。やはり日本文化の精神をその根幹に於いて把み、それを自由自在に働かして、一方にそれを擴大して他を化する力とすると共に、他方にそれを融通して他を受ける力とすることがなければならぬ。この擴大と融通とがなければ、日本の世界史的展開の事業は完成を期し難い。

それには第二に擧げた文化的價値の識別力を養ふことが必要である。日本精神を叫んでも、我々の祖先や我々の同時代者の作つた文化の價値を、現實に識別する力がなくては、その叫びは空虚になる。日本國民の心の底に潜む西洋崇拜も實はこゝから來るのである。この卑屈な崇拜を心に潜めながら表に日本精神をひけらかすといふ有様では、大東亞の指導者となることは困難である。併しかうした本當の自覺は必要に應じて一晚では出來ない。我々の心懸を變へると共に勉強をしなければならぬ。(昭和十七年三月十三日)

私の發言

今度の選舉に於いて要求せられる清新有爲の人物とは、今まで考へられて居た御用黨とか反對黨とかいふのとは、全く選を異にしたものだと思ふ。御用黨として徒らに政府に盲従する者も、反對黨として反對のために反對する者も、本當の意味に於いて大政翼賛の大任に當ることは出来まい、政府當局は既に議員候補者の推薦は官選候補を作る意味ではないと明言して居る。事毎に政府のお先棒をかつぐことによつて、自分に都合のわるい者を排斥したり、無節操な便乗と阿附とによつて結局自分の權勢利慾の要求を充たさうとしたりする者の如きは、國民の要望にかなはぬのみならず、また政府の註文にも適しないものであらう。我々は政府が今までの如くたびたび更迭することなく、十分な信念と努力をもつて今日の難局を突破することを切望するが、同時に政府のかうして選舉に力を注ぐことが、議會の職能

を尊重して、議會の論議と忠言とに十分傾聴するだけの誠意に基づくものなるを信じ、従つて議會も亦黨派的や個人的の立場からでなく、眞に國家的の立場から政府に協賛すると共に、おのづから政府を憚らしめるだけの信念と公正とを有するものでなければならぬと思ふ。議會は國民の議會でなく天皇陛下の議會であるといはれるけれども、一君億民の我が國柄に於いては、天皇の議會たることを、同時に眞に國民の議會たる所以であると思ふ。是を是とし非を非として政府をしてその方途を誤らしめないことが、議員が上は天皇に對し奉り、下は國民に對して負ふ所の責務である。

眞に憂國の情に充ち、權勢の私を離れて、しかも自己の信念を發表し貫徹し得るだけの勇氣ある者が、一人でも多く議員として選ばれることを切望する。また最も肝腎なことは、議員が或る職域若くは階級に偏することなく、あらゆる職域、あらゆる階級から多方面に選出せられて、もつて日本國民全體を一丸とした翼賛の誠が、新議會の裏に實現せられることである。(昭和十七年三月三十日)

文科の志望者

近頃非常時股賑産業、軍事政務の多端から、工學士、法學士、經濟學士、それから理學士までも、需用が實に豊富で、従つてその待遇も向上し、それ等の志望者は甚だ多いが、文科方面の文化科學者や教育者等の仕事は、需用はあつても報いられる所が少く、人は不足して居ても志望者は一向振はないといふ實狀である。この春一高で聞いた所でも、文科の卒業生二百餘名中、文學部全體を通じて志望者はたつた十二三人ださうである。以て一般の趨勢を窺知するに足りる。これは心理的、自然的にある程度まで必然の現象ではあるが、邦家が危急を通じて大いに興らんとする時、また興るべき時、果してこれがかまはないか。識者は邦家百年のために考へかつ具體的方案を立てて、これを實行に移さねばなるまい。

(昭和十五年一月二日)

支配者

プラトンの理想國は、プラトン自身が現實に頓着なく思ふ存分に描いた國家であるが、しかし當時のギリシアやアテーネの國情を反映するばかりでなく、現代の現實にも觸れるところが中々多い。その中で國家の支配者、指導者は、三十歳かまでかかつて體育、音樂教育、知育特に最高の教育なる哲學をやつた末、國々を旅行したり實戰に従軍したりして、生きた生活を體驗しかつ心膽を練らねばならなかつた。さういふ有資格者に限つて中々支配者にはなりたがらないのを、無理になつてもらはねばならないのである。支配者には我が家、我が妻、我が子、我が財がない。これはほとんど誰人にも望み得ないことであるが、支配者の第一の資格が、精神的にも物質的にも「私」といふものがなく、いはば國家と結婚するにあるを語るものであらう。(昭和十六年八月二日)

日本人の話術

翼賛會の協力會議で、選ばれた會議員が十分とか十五分とか限られて發言するのを聽いてゐると、多くの人がその短い發言の中に、大抵序言と結語とを附加する。さうしてそれは多くは同じものである。かういふ限られた時間に相當多數の人々が發言をするのだといふ、會議の全體的構成に對する反省が乏しいのである。少ない時間の中に反復が相當の分量を占める。私の聞いたところによる或るクラブでは、その會合の卓上談話に於いて、前口上（プロローグ）と後口上（エピローグ）は禁制であり、殊に自分の話に對する辯解（エキスキューズ）は嚴禁だといふが、これは少し位學ぶに足りることであらう。

次に内容であるが、その内容にも類似や反復が多い、さうして存外現實的でなくて觀念的なものが多く、従つて夫々の人が立つてする發言を意味づける特殊性が乏しい。尤もそれが

全國的な要望であれば、各地から反復されるといふ事實も、一つの現實真相を傳へるものと考へねばなるまい。但しさういふ共通な要望も亦、地方地方の現實に即して語られることによつて具體性を得るのだといふことを忘れたくない。各々の發言が特殊な具體性を持つて居り、それが集まつて國民全體の要望を盛り上げる所に、協力會議員發言の意味があるかと思ふ。上の趣旨は言論ばかりでなく、政治經濟文化の諸方面の實踐に於いても亦發揮せられなければならない。國家や國民の活動が全體的趣旨を全うするためには、このことが是非必要だからである。日本の大臣たちの演説やその他の訓示くらゐ、個性の出ない、生き生きした味のないものはない。それに比べれば友國の主席汪精衛氏の演説等は、内容も立派だが、斷片にしてもその人らしい個性の出で居る所が及びがたい。日本人は身振なしに座談や卓上談話をする時には、中々面白いといふことをいふばかりでなく、實に潑刺たる話をする人が多いのに、ああいふ公の話になると、どうしてあんなに紋切型の、魂のない、徒らに美辭麗句を並べた、生きて居ない、自分の詞でないやうな詞を語るものであらうか。議會はもはや雄辯の府であるを得なくなつたが、我國がかうした未曾有の時局に直面して、國民的精神の昂揚して居る時、どうしてかくも他人の文章の朗讀に過ぎないやうな演説のみがあつて、その氣

3

魄直ちに、一億國民に迫るやうな雄辯がないのであらうか。(昭和十七年三月三十一日)

新任の挨拶

我が祖國が未曾有の國際的國內的難局を切り抜けようとする時に當つて、私は乏しきを第一高等學校長に受けることになつた。自分の母校で潑刺たる天下の青年に接することは愉快であるが、併し私の任務は中々困難であつて、それを思ふと心が重くなる位である。だが教職員諸君の御協力により、菲才と微力とを盡してその任を果したいと決心してゐる。よし中道にして倒れるとしても、難きを凌いで最善を盡すことが出来たとすれば、男子の本懐これに過ぎない。

今の時勢は教育の上にも新たな統制を加へんとして居る。併し統制の本義は力を全體に遍からしめると共に、これを集め、強めようとするにあつて、決して力を抑へ、生命を萎ましめるにあるのではない。今の時勢に於いても生徒の自發的な力の尊重さるべきは固よりであ

り、單なる壓制と命令によつて百事成すべしとなさば、それは大いなる考へ違ひである。けれども我々も生徒も、傳統の美名に隠れて苟安を貪つたり、舊習に泥んで新たなる出發を忘れるならば、我々の誇とする歴史も、竟に惰性と反復とに終つて歴史の歴史たる所以の發展はなくなつてしまふ。この點は大いに猛省すべき所である。今や寮生の間にも、自ら進んで今日の時勢の正しき認識を志し、強い實行に赴かんとする氣運の動いて居るのは、私の大いなる歡びとする所である。

我々の一高は六十餘年の歴史を有し、同窓先輩の世に出でて重要な位置を占める者多く、それが我々の學校の社會的位置を重からしめ、社會的評價を高からしめたことはいふまでもない。我校は大都の中にあつて、七萬坪の樹木に富んだ地域を領するのみならず、その上特に運動諸部に至つては、長い間の同窓先輩の高庇によつて、事毎にその惠澤を受けることが多い。これは實に我校生徒の非常な幸福に外ならぬが、又他方から見ると、動もすれば先輩の厚意に忤れて、自己の最善の力を盡すことを怠らしめる場合がないでもない。生徒自身が自制反省すべきであると共に、先輩諸君もその點に於いて後進を甘やかすことなく、彼等が常に自分の力に便り正しき道を離れぬやうに、是正指導して頂きたいものである。これが生

徒と先輩との喜ばしき友情を、益々恒久的ならしめる所以だと信ずる。

私は生徒の殆ど全部を寮に收容することが、我校教育の特色を成して來たと信ずる。併しその特色の中には、どうでもよいものも、破棄すべきものも、改善すべきものも、保存すべきものもあらう。さういふことの検討は、今後我々も進んでやつて行きたいと思ふが、何よりも今私の心配するのは、寮生の健康の問題である。我校の生徒の過半は、幼時より東京といふ不秩序な大都會の黃塵を吸つて成長して來た上に、學を好んで勉強する傾のものが多いといふこともあらう、元來不健康で脆弱なものが相當澤山あるやうである。併し身體の脆弱は長い精神的緊張を困難にし、長い仕事を堪へ得なくする。我日本が祖國と東洋と世界とに負へる使命の重く遠いことを思へば、我々は何よりも身體の健康を心がけねばならない。その點に於いて寮生活が果して如何なる役目を盡して居るか、又如何なる害惡を醸して居るかは、我々の頭上に迫れる問題として切に検討せずには居られぬことである。我々はその爲には、寮生活がより一層健全な、明朗な、秩序あり、清潔なものにならねばならないと信ずる。その點についての諸設備も亦、専門科學の見地から色々必要とせられるであらうが、何よりも寮生の反省と實行とによつて、寮生自身の自愛と共にその全體生活の整調の育成されるこ

とを望まねばならない。運動の合宜、飲食の攝制、睡眠の充足の如きは、やはり寮全體の生活が、この肝要事にめざめて新しい方向を取るものでなければ期し難い。

我々の生活には強い緊張と共に、朗かな或は靜かなくつろぎが欲しい。かくて生活が枯木のやうに固いものにならないで、濕ひと強さとが共に具はる弾力性あるものになるのである。青年の時代は鬱勃たる元氣や情熱をもてあますものであるから、往々にして極端に走ることも、あながちに咎めるべきではない。併しさういふ場合、自分に死すとも悔いざる本氣さがあるかどうか、自分の裏に何等かの氣取りや見えはないか、自分を自分で甘やかして自己陶醉に耽つて居ることのないかは、嚴しく反省さるべきである。若い時に過を冒さず恥をかかないといふことは期し難い。若いいのちを生きることは、殆ど過を冒し恥を重ねることであるといつてもよい。併しそれに對して強い自省による超克がなければ、若い生活の意義は稀薄になつてしまふ。「郷愿は徳の賊なり」とは孔子もいはれた。諸君が若い時からあまりにすましこんだ君子や、ただ自分を高しとしてしやちこばつて居るパリサイの徒とならないことは、何よりも望ましいことである。型が出来てかたづいて居ることは無事であるが、無事だけが我々の理想でない。色々な悩みと困難と疑惑との間に、それにくづほれてしまはぬ眞

面目な探求心を諸君に向つて求めたい。

同窓會報に書く文章として或はふさはしくないかと思つたが、感ずるままに書き流したわけである。(昭和十五年十月廿四日)

雑感

新任の挨拶はもう既に述べたから、雑感の一端を書くことにする。諸君の前に立つて所懐を述べる機会は今後も度々あること故、さう急いで總てを話さなくてもいいだらう。

さて寄宿寮の現状は、千人以上の寮生、即ち殆ど一高生の全體に近い數を收容して、皆寄宿制度なるものの實を發揮し得て居ることは喜ばしい。この八月末、私の就任前にあつた高等學校長會議の筆記を見ても、方々の校長の中には皆寄宿制度を希望して居る者が多い。然るに一高は全國の高等學校の中にあつて、全校の生徒を收容するに近い寄宿寮の設備を持ち、而も大都會の一隅にありながら、樹木に富んだ廣闊な地域をその周圍に擁して居ることを感謝しなければならぬ。併し私は私自身の寮生時代に何も寄宿生活を讚美したわけではなかつた。現に私の親友で大學を出ると直ぐ死んだ魚住影雄は、當時の校友會雜誌々上に「個人

主義を論じて皆寄宿制度の廢止に及ぶ」といふ悲壯激烈なる論文を發表して、運動部の連中の憤慨に觸れ、危く鐵拳制裁を加へられんとしたことである。

個人主義だとか何だとかいふ名目は別として、彼の抗議は主として、寮生活が自己生活への沈潜を妨碍するといふ點にあつた。このことは一方に皆寄宿制度といふものを強く主張すればする程、他方に於いて反省されなければならぬことである。一千人の若い我儘な元氣な學生が、その多情多感な青年時代の主觀から出て來る種々雑多な要求を提げて一所に集まつて居るのだから、全體の統制と個々人の要求との調和といふことは、中々困難である。併し皆寄宿制度なるものがこの調和を前提として設けられて居るのだといふことを、君は先づ考へねばならない。さうしてこの調和は自然に與へられたものではなくて、努力によつてかち得られねばならぬものである。さうしてその根本は眞の自敬自愛と他敬他愛との交互的な不可離な關係から、自己の生活の全體に繋るといふ自覺を根柢とすべきものであらう。皆寄宿制度を強行するに當つては、皆寄宿なるものがそれだけの價值と意義とを持たねばならず、さうしてそれは即ち主として寮生全體の良心と努力とによつて創造せらるべきものであることとに氣づかれねばならない。寄宿寮は修養の道場であると共に、慰安の家庭である。さうし

て、この兩者たる役目を果す爲には、そこに規律と秩序とが存しなければならぬ。修養の道場として勉學の部屋として、規律と秩序との要求せられるのは自明のことであり、例へば禪堂の規則が如何に嚴重を極めるかを見れば、それは直ぐに首肯される。我々は常に我々の行動を、我々の心の適する處に従つて、他に依存することなく、獨立自主的に動かして行くことを願ふと共に、又他方から鉗鎚を甘受したり、自分も人も好まぬことを進んでやるといふ奉仕の念を養はねばならない。さういふ意味で、この頃の家庭は、子供を家庭の爲に勞せしめることの少ない爲に、かういふ心懸の養成に缺ける所がなしとしない。

慰安の家といつたが、我々にとつての最大の慰安は實に安眠である。この安眠を大事にすることが寮生活の重要事でないならぬ。ニイチエはドイツ人が精神的精神的といつて衣食住を輕蔑する弊を罵倒して居た。ブルノー・タウトはその興味ある日本人觀の中に、日本人は夜十二時頃まで躁いで、朝は早朝から起き、さうして晝間は居睡りばかりして居ると言つて居る。

子供の時から設備や習慣上濃い眠りを取る點に不足することが、日本人の肉體的の強靱、従つて精神的緊張を減少して居ることがどんなに多いかは、恐らく思ひ半ばに過ぎるものが

あるであらう。此の間も一高の寄宿寮を出た若い文學士に、寮生活で困ることを聞いて見たら、睡眠の妨げられること、さうしてそれが寮生活全體の基調を亂すことを指摘して居たが、これは中々適切な見方である。或る特別な祭日とか休日とかいふ日に、夜を徹して歌つたり語つたりするのもよからう。平日の生活は妨げられざる安眠に基づく規則ある生活に、今少しでも近づけられねばならぬのではなからうか。

深夜眠りを成さずして運動場を彷徨したいといふやうな氣持も、若い時の感傷には抑へ難いであらう。ただかういふ時にも友の眠りを妨げないといふデリケートな心遣ひこそ望ましい。

5。
一事は萬事である。今日はただ心づいた一端をのみ書いた。時に従ひ事に應じて、又この偶感を續けることもあらう。

第五十一回記念祭に臨んで

去年我々日本國民はちやうど逢ひ難き紀元二千六百年を迎へ、我が寄宿寮も亦第五十回といふよきめでたい數の記念祭を迎へた。さうして今や紀元二千六百一年と共にこゝに又第五十一回の記念祭を迎へんとして居る。二千六百年を送つて、その第一歩を踏み出す我が祖國の歩みが、實に重大極まれる第一歩である如く、第五十年を送つてその第一歩を踏み出す我寮も亦、まことに重大な時勢の波の唯中に歩み入るものといはねばならない。我が寄宿寮の開かれた明治二十三年は、恰も帝國憲法發布の翌年にして、又教育勅語降下の年に當つた。私が一高に在學した明治三十七八年は、恰も日露戰役に際會して、「北シベリヤに風荒く、西黃海に波高き、今年の春の記念祭、健兒無限の思ひあり」と寮歌にうたはれた頃である。その外この五十年間に我々の祖國が經過し來つた大事件を數へ立てれば、實に枚擧に遑がな

い。日本はこの五十年間に毎年毎年大なる事件を迎へ且送る内に、實にすばらしい成長を遂げて來た。併し今年といふ今年は、實に開闢以來未だ會てない多難にして重大な年であらう。最近約十年來非常時の聲は年々歳々連呼され、我々は新しき年を迎へる毎にその年が何を我に齎らすか、如何に結ばれるかについて、いつも深大なる關心を抱いたものであるが、而も今年こそは實に、日本がのるかそるか重大危機に乗り入つたといふことを、特に切實に感ぜざるを得ないのである。

例へば日露戰役の時には、少數の非戰論者が反戰を公にしたけれども、國民は多くこれを顧慮することなく、舉國一致の實を示し得たのであつた。今日に於いては世間の氣持がいらいらして居り、動もすれば煩細な事柄までも取り上げてこれを政治問題と結びつけるやうな傾きがある。これは更新の業が未だ内から發し切らないといふことにもより、事を好む者の狹量にもより、勢力を得んとするものの野心にもよるではあらうが、又國家の政治的状況が緊迫して、それに對して異を立つることを許し難いといふ客觀的實情にもよるのである。日露戰役の結末は、これに憤慨した國民大多數の考へた様に、容易な事態の下に解決せられたのではなかつたが、併しアメリカは當時日本の友邦として日本に厚意を示し、イギリスも兎

に角同盟國であつた。今日我國に敵性を示す國も同盟の國も共にあるが、各々の強國が皆我國と同じく自國の運命を賭して戦つて居り、他國との聯合も皆自國の存亡といふ焦眉の急務を中心として行はれることを思へば、頼む所はただ自分のみである。我國の企てた東亞新秩序の課題が困難にして重大な仕事であればある程、その國際的關聯も國際的障も亦、重大にして廣汎なるは自然の勢であり、我々の責任の愈々重きを加へることも亦必然の勢である。かういふ時節に當つて、我が寄宿寮は第五十一回の記念祭を迎へるのである。年に一度のお祭のことだから、賑やかにやらうとするのは自然の人情である。併し今日の緊迫した時勢下にあつて、例年と同じやうに記念祭をやるのはどうかといふ疑問は、當然起るべきはすものである。果然教授の間にも生徒の間にも、記念祭はよろしく嚴肅に行ふべし、餘興的行事は廢すべし、校外から多くの子女を招くことは止めた方がいい、といふやうな議論が起つて來た。さうしてその中最も重要なものは、從來記念祭に附物だと考へられた飾物をやるか止めるかの問題であつた。さうして現在の委員は結束して飾物をやることを決定し、生徒主事諸君を通じて私にその意を通じて來た。これに對する私の態度は、それを容認するかせぬかの二つより外はない。この二三年飾物について様々の苦い經驗を嘗められた生徒主事諸君

は、何れかといへば消極的の意見であつた。これに對して委員達は、是非ともやりたい、これがなくては記念祭も記念祭らしくなくなる、といふ熱心な要望を開陳して來た。私は考慮の末委員側の願を容れることにした。今日のやうな時勢に際して、飾物を廢止することの無難であることは、よく分つて居る。飾物を廢止したといつて、これに道德的非難を加へるものは恐らくあるまい。併し飾物をやり校外の訪客を容れるといふことに對しては、今日の時勢にふさはしくないといふ非難は十分起り得る。而も私はこの非難の起りさうな考へ方の決定を敢てしたのであつた。この點に就いての私の責任は、どうしても免るべからざるものである。既に許可して後、生徒の側からも教授の側からも、反對の意見が起り、某教授の如きは眞摯に熱烈にその反對意見を私の前に陳ぜられた。私はその忠言を嬉しく思ひつつも、一旦許可した飾物を取り消す氣には遂になれなかつた。それは左の如き見解からであつた。私は先づやりたいといふ生徒諸君の意志を壅塞することの不可なるを思つた。その上今日の艱險な時局にあつても尙、一日の記念祭を楽しく朗かに過すことは、許さるべきだと信じた。否非常時に堪へる力を貯へる爲には、かうして朗かに無邪氣に愉快に楽しむといふ氣持も亦必要だと信じた。時あつてか大いに楽しむことも、艱深な試煉に負かされない弾力性を

養ふ所以である。年に一度の記念祭を楽しく迎へるといふことは、嚴肅なる忍苦の覺悟と兩立しないものではない。この意味からして、飾物を作つて我寮を訪ひ來る客と共に一日を樂しむことも亦、可なりと考へたのである。ただ併し今日は物資の節約の非常に要請せられる時代である。飾物の爲に用ひられる材料は、今日の時勢に於いても尙且九牛の一毛に過ぎないであらう。併し我々は苟も後日に於いて再び用ひ得られる資材を、それがよし輕少であつても、これを拋棄し又は燒盡するやうなことは、上下相共に些少の資材をも惜まんとする今日に於いて、堪へ難しとする所である。そこで私は委員に向つて明年も役立つべき資材を保存することを要求した。昔から我國ではお祭の飾は多く燒き拂ふのが例であつた。一日の歡樂を終へてかうした飾物を燒くことは、その歡樂の感じを一層強くする効果もある。若い人としては殊にこの氣持を抑へ難いであらう。併しそれをやらずしてその資材を保存するところにこそ、闔國の臣民の努力に協同するといふ我々の心意氣が發揮せられることを思へば、我々はこの感情を抑へるくらゐのことは、どうしてもやらなければならない。

今日の時勢は學國一致を要求して止まない。我々が本當に國の爲に銘々の持場に立つてその最善を盡すべき時は、方に今にある。我々は今日の情勢を生み來つた諸々の處置に對して、

決して批判や非難を持たないわけではない。併し我々の死命を制する矢がぐさりと我々の身に刺された時、徒らにその矢が何處から來たか、その矢がどういふ矢であるかを論らふべきではない。我々にとつての緊要事は、先づ何よりもその矢を抜くにある。今日の時局に對して、進んでこれを擔はんとする責任感と協力感を示さずして、徒らに反感を以てこれを嘲つたり、皮肉を以てちやかしたり、白眼を以て冷笑したりするのは、日本國民としての我々の位置に對して、深刻なる自覺を有するものとはいはれない。學國一致の必要は聲を涵らして呼號せられるに拘らず、到る處に權力の競争があつたり、私利の追求があつたりして、國家の公事が私を遂げる爲の手段とされたり、心あるものが動もすれば背後に退き、野望を抱くものが徒らにのさばり出たりする如き現象は、かういふことの斷じて忌避せられるべき時勢に於いて却て多いといふ例は、今日に於いても全然跡を斷つたといへぬこと勿論であるが、我々は單に反感を以てこれを見るに止まらず、自分の實行によつて積極的にそれを匡正する努力が、少なくとも心ぐみが必要である。さうしてその最もつましい努力は、即ち自分がさういふ行爲の掣みに倣はずして、毅然たる信念を自己の行爲に於いて示すことにある。一人でもさういふ人物が多ければ多い程、社會國家の風尚と方向とが健全になることは争はれ

ない。今日の時勢に於いてかういふ行爲は存外に困難であつて、動もすれば威嚇や流言蜚語におびえて、信念なくふらふらとしがちなものである。時勢の艱險の裏にあつて、我々はよしさやかなりとも目だたずとも、この方向への努力を怠つてはならない。

我々は黒い喪服を着た未亡人の如き憂鬱な顔をして、今日の街頭を歩くべきではない。新たな試煉を受ける覺悟を胸に懷いて、一日の記念祭の行樂を迎へ且送るべきである。我々の試煉は決して少なきを、又輕きを憂へない。同時に我々の祭日も亦朗かに行はるべきものである。飾物に反對だつた人々も、願はくば共に一つ心を以て今日の祭を迎へてもらひたい。さうして共に國家の要求する試煉に就かう。時局の切迫は諸君の忍苦と鍛鍊とを一層要求するであらう。諸君の若い命が國の爲に召される機會も一層多くなるであらう。併しそれ等を通じてそれにも益して要求せられるのは、諸君がほんものになることである。忠君の看板を掲げるだけでは今日の難局に堪へることは出来ない。愛國を賣物にするだけでは今日の危機を凌ぐことは出来ない。今や眞の忠君の士、眞の愛國の士の要求せられる時である。曲學阿世の學者は太平の時代にはその生存を保證せられましょう。又兪惡の時勢に却て幅をきかすこともあらう。併し艱險なる時勢を救ふところの力は、眞理に忠なる學者のみによく

堪へ得るところである。例を自然科学者につけて見よう。彼等が國家の必要の爲に或る期間を限つて或る研究を命ぜられたとしよう。學問的良心なき學者は、その時期に至つて、自分の成績を糊塗して素人なる上官の眼をごまかし、その嘉賞に與かることもあらう。さうしてこれが時勢即應の道だと心得て居るかも知れない。而も一方或る學者はその良心の爲に自己の研究の未成を詐はることが出来ず、さうして上官からは認められないといふこともあらう。併しかういふ良心ある學者を勵ましてその研究を續けしめるのでなければ、眞の科學は起りやうはない。従つて本當に適切な科學の應用も、この應用による國利民福も、國防國家の實力も亦養はれることは出来ない。これを達しようとするれば、迂遠のやうでもやはり科學の眞の精神にめざめて、良心ある科學者の研究に待つ外はない。インテキを重ねることによつて益と重大を加ふる今日の時局を救ふことは、遂に出来つこはない。

將來國家の中堅となるべき寮生諸君、諸君の努力すべきは、今日の時勢の認識、この認識の下に沮喪することなく、この認識を策勵として、このほんものに、この平常心に腰を据ゑることである。かくすることによつて、諸君はほんたうに非常時に處することが出来る。諸君は政治家の手先となつて盲動しなくても、今日唯今生徒たる立場にあつても、この平常心

を養ふことが出来るはずである。

我々は方に第五十一回の記念祭を迎へんとする。さうして來ん年の第五十二回記念祭を如何に迎へるかを想ふと、胸中に感慨の來往頻なるを覺える。

去年二千六百年の式典と祝宴とに當り、連日の陰雲も雨風も全く晴れて、千代田の森の上に澄みきつた青空を仰いだ時、我々はそぞろに我が祖國の前途の光榮を祝福せんとする心の、我々の衷より動き來るを覺えた。併しこの光榮と光明とは、前途更に幾多の霜雪と暴風と雨とを経て、我々の上に輝き來るであらう。我々の祈念する所は、我々の子孫の爲に、來るべき二千七百年の祝日を光明に満ちたる贈物として、今から用意することではなければならぬ。この覺悟を胸に抱いて、朗かにこの記念祭を迎へようではないか。

これは一月二十二日に生徒諸君に告げた詞を記憶をたどつて書いたものである。(昭和十六年一月廿三日夜)

共濟部へ

我が一高は俊才の多いことも事實であらうが、又富裕でなく學資を他家から仰ぐ生徒も、他校に比して多いやうである。かういふ事情の下に、卑屈な不快な氣持を経験することなく、學資の補助を受けたり、仕事を周旋してもらつたりする設備として、我が共濟部のあることは、誠に喜ばしいことである。

我が共濟部の役員に希望することは、さうした幹旋をする場合に、出来るだけ親切であるのは勿論、同時にあくまで公な氣持を失ふことなく、それによつて私恩を賣るが如き心の毫厘もなからんことである。又補助や幹旋を受ける側としては、卑屈な心持を排する。共に、あくまで感恩の心を失はざらんことを切望する。併し又その恩に感じこれに報ゆるの道は、結局その厚意をば、自分を健かに正しく成長せしめるに資して遺憾なきを期するにある。た

だ私の憂ふる所は、一高生活をする青年諸君は、動もすればストウルム・ウント・ドラックの間にもまれ、色々な憂悶に執へられ、どうかすると仕事をするのにもの懶くなつたり、學資の補助を受ける資格を缺くに至つたりすることもあらう。かういふ間の苦勞を凌いで行くといふことも、諸君にとつて一つの試煉であらうが、その間に立つても、前にいつた卑屈に陥らず、感恩を忘れぬといふことは、よし困難であつても諸君の貫かねばならぬ大切事だといはねばならない。色々な刺戟と感慨と苦惱との多い諸君の若いこの時期に當つて、諸君の自愛自重を祈つてやまない。

同窓會の諸兄へ

小生が乏しきを本校の校長に受けてから、早くも一年餘りの日月が過ぎました。教育の事業は永遠なものですから、固より功を短日月の間に期する積りはありませんが、併し眼前の事務や事件に應接して居る間に、あはただしくその日その日が過ぎて行くのは、恐ろしいやうな氣持がします。小生の着任匆々いきなり校友會改組といふ指令が下つたり、又入學試験の方法の變更があつたりして、相當面喰ひましたが、幸に職員諸君、殊に當時の幹部、生徒主事諸君の獻身的な努力によつて、大たいの目鼻をつけることが出来ました。當局の意向は一樣に報國團と改名するにあつたやうですが、本校の精神が護國旗を回つて起つにあると思ひ、第一高等學校校友會を第一高等學校護國會と改名することにしました。併し内容の改善は名稱の改變の如く容易ではありません。傳統の良さと共にいつのまにか色々の積弊を作るこ

とをも免れなかつた護國會各部各班の内容を改善充實せしめる爲には、我々職員生徒の永き努力を要するのは固よりですが、又同窓先輩諸君の批判と鞭撻と協力とを切望せざるを得ません。

時局は日に月に緊迫を告げ、學校も内外共に多事になり、當局からの指令や世間からの註文も、應接に追ない程頻繁になりました。この現實の世態や要求を處理しつつ、時勢の變化を貫ける教育の永遠性を逸しないことは、小生の如き凡骨には中々困難なことではありますが、併し教育が時勢を追つて徒らに猫の眼の如く變つていいものでなく、而も現實を無視したり遊離したりした非歴史的な永遠性なるものが、抽象的死物に過ぎないことを思へば、この間に處してやはり篤鈍に鞭ちつつ、正しい中道を歩むことに躊躇してはならぬとの覺悟だけはして居ります。この點も同窓諸兄の御共感と御協力とを仰がねばなりません。

國際情勢の緊迫と共に、社會も世智辛くなり、先生及び生徒に對する要求も繁多になつて來ます。寄宿寮に於いても、諸兄の時には夢想だもしなかつた食料問題があり、生徒に向つても或は農作の勤勞が課せられたり、兵器廠への手傳ひが命ぜられたり、又殊に最近時局の急迫に伴ひ、學校報國隊の組織が命ぜられ、急變に臨んで學校を守るは固より、外に出て市

民と共に勞するを得るだけの、態勢と用意と鍛鍊とをして置かねばならぬやうになりました。かういふ時勢に當つて、先生と生徒とが徒らにおびえたりいらしたりすることがあつては、それこそ邦家の深憂これに過ぎるものはありません。近來時勢の要求によつて軍事教練が益々強化されることになりました。この教練に對する態度は、諸兄の時代とは比べものならぬ程眞面目になりましたが、やはり從來の惰性によるだらしなさが残つて居ります。今日の如く時代の風波の荒い時に、徒らに消極的に過去の遺風に拘泥して居る者は、朝に一城を抜かれ、夕に一壘を取られ、結局はぶつぶついひながら時勢に引きずられてゆく外ありません。我々は積極的に取るべきは取り、捨つべきは捨て、従ふべきは従ひ、拒むべきは拒み、世間の徒らに今日の教育と學生とを罵倒して得意になつて居る者を見返し得るだけの、態度と行動とを示さねばならぬと思ひます。この點に於いて一高生及び一高全體に残つて居る保守倫安の氣風は、打破せねばならぬと信じます。總て世間の弊風は美風と同居して居ることが多いのであり、我が一高といへどもその例には洩れません。弊風を打破する時には、概ね同時に過去の美風を破壊するといふ感を起させるものであり、これが過去に執着する保守者流の反對を招く點でもあります。角を矯めて牛を殺すことは飽くまでも避けねばなりません。

が、併し牛を生かすに角を矯めねばならぬ場合もあり、角を矯めることが牛を殺さぬ場合もありませう。かういふ色々な場合を辨別するに盲目であつてはならぬと信じます。

今一高に居る生徒を初として、今後二三十年間位の青年壯年は、特に日本國家の興廢の瀬戸際に立つて苦勞してもらはねばならぬと思ひますと、彼等の負擔の餘りに大きいことが氣の毒になつて、思はず黯然とした氣持にさへなります。我々は徒らに彼等に向つて呼號し命令するばかりでなく、我々彼等の先に生れて今日の時勢を彼等に譲り渡す者の責任を痛感し、彼等をして我々の過失や怯懦や怠惰や不正直を否定し、進んで新たなる局面を打開するに足るだけの力を養はしめるのでなければ、日本の前途は危いのであります。かういふことを考へる毎に、私は自分の力の極めて小さなことを痛感せざるを得ません。

先輩諸君に會ふ時にいつも聞かれることは、一高生も變つたでせう、元氣がなくなつたでせう、といふ詞です。變ることは當然であり、元氣の減つたことも事實かも知れません。それには外に色々な原因もありますが、併し今日の時局の重大が有史以來未だ曾つてなかつたものであり、時勢の生徒に對する要請も刺戟も壓迫も共に前代と比べものでないことを思ひ、又世間が青年學徒に向つて元氣を要求する如くにして實は無氣力を要求せること等を思ひ合

せば、私は徒らに一高生を甘やかすことの排斥すべきと共に、又彼等に同情を惜むわけにはいきません。さういふ點にも同窓諸兄の諒解と激勵とを要望したのであります。

日本は今やあらゆる方面に向つて飛躍を強ひられて居る。その中にも學問の進歩、獨創の發揮はその最たるものであります。然るに國家と時勢との要求は、或は學年の短縮（本年度は幸にしてそれを免れました）、或は教練の強化、或は勞役奉仕といふやうな形を以て、授業と自修との時間に割りこむことを免れない。かういふ不平が先生からも生徒からも出て來るのは一應當然のことです。この間にあつて學力の減退を出來るだけ防止して、國家永遠の禍根を少なくすることは、我々が最も力を注ぐべきことであります。ただ考ふべきは、今までのやりかたを動かすべからざる最善のものやうに考へ、これを以てこの事態に應ぜんとすることの深大なる誤解たることであります。この難局に處して出來るだけ輕重大小を分別し、むだを省くと共に要所を逸せず、弾力性を發揮して情性に負けることなく、生活を規律することによつて休養の時を見出し、我々の生活を一方にいらだたせ他方にだらけさせることなく、緊張と共に餘裕を存する工夫が肝要だと思ひます。かういふ點に於いても、世間の青年學徒に對する理解が淺く、徒らに彼等の形式的緊張を責めて、必要な餘裕と休養と

をさへ奪はうとすることを遺憾に思ひます。

今一つ同窓諸兄の御考慮を願ひたいことは、一高生の健康状態であります。體格検査は年
年嚴密を加へるに拘らず、生徒の健康水準が低下することは、その原因はしばらく間はす
するも、實に深憂に堪へません。生徒自身の衛生に對する無知及び意志薄弱、寮生活の不規
則、亂雜等にそのかなりの原因の存すること、その點に於いて生徒自身の自省と生活の改善
とを要することは勿論でありますし、又その邊に多少の進歩の見べきものがないではあり
ませんが、併し設備其他に於いて改善を加へる必要もあり、當事者に於いても色々考慮中
あります。

我が一高は舊い學校である爲に、同窓先輩諸兄の數が多く力も大きく、それによつて生徒
がどんなに恩恵に浴して居るか知れません。特に關屋理事長の熱心な御盡力に對しては感謝
の辭に窮する位であります。一高生徒と共に深く御禮を申上げると共に、學校の近狀と小生
の心持とを陳べて御挨拶に代へ、尙今後の御鞭撻と御協力とを祈ります。

附記

(昭和十六年十月神嘗祭前日)

十二月八日宣戰喚發せられてより、雲霧を開いて烈日を見るの感があり、日本國民全體の

氣持と共に一高全體の氣持も一新を見ました。併し紙の都合で印刷に附せられなかつた私
のこの文章の意味が、全然無に歸するとは思へません。唯今多忙の爲この舊稿をそのまま
戴せさせて頂きます。(昭和十七年一月十六日)

第五十二回記念祭に臨みて

・今年の春の記念祭こそ、實に逢ひがたき稀有の記念祭である。今日の國際態勢が幾年續くかは測り難いが、我が國民が開闢以來の大難局に決然として立つたその最初回の記念祭として、我々には忘れようとしても忘れ得ぬ日でなければならぬ。

一國がその國の興亡を賭するやうな大事を決定するに慎重であるべきは勿論であるが、既にそれを決した以上、もうそれは運命的な動かし難さを以てその國民の上のしかかるのである。併しこの運命に従つてそれを打開するか、その下に壓されて窒息に甘んずるかは、國民の意志如何による。

日支事變に就いてはしばらく言はず、日獨伊同盟が幾多のいきさつを経て結ばれた時、對米英戰爭の契機は殆ど大半以上出來て居つたといつてよい。それはその時既に我國の去就を

世界を二分する陣營の一つに決定したからである。これが更に簡明率直な形を取つたのが今度の戰爭である。日支事變は初め不擴大を豫期しつつも四年を越ゆるに至り、大陸に於ける長期建設、東亞新秩序が叫ばれるに至つたが、この動もすれば抽象的聲明に流れんとした東亞の新秩序も、この度の米英を相手にまはす開戦と共に、具體的なつびきならぬものとなつて來た。我が國民が指導者となつて東亞に新秩序を堅く建設し得るか否かは、直ちに大東亞戰爭の意義を生かすか殺すかの決裁となるのである。個人にとつても決意はその人を生かすか殺すかの契機となる。況んや國家がなしたこの重大な決定が、國民に歴史的な深刻な責任を課することはいふまでもない。我々は今や世界史的轉機の岸頭に起ち上らせられた。我々の力によつて世界史的に新たなる局面を展開するか、世界史的に屈服するか瀬戸際に臨んだのである。ヒットラーの言ひぐさではないが、我々は實に向後一千年の祖國の運命と世界史の方向とを決定する力を、我等の雙肩に置かれたのである。我が國家の又我が國民の道德的、文化的生命の將來を信する者は、有無をいふことなく、如何にしてもこの一戦を勝ち抜かなければならない。

それにしても我々はこの緒戦の勝利に對して、我が護國の陸海軍に感謝しないでは居られ

ない。これは緒戦とはいふけれども、その及ぼす影響の大きさと深さと長さに至つては、恐らく現在の我々がそれを測定し得ない程のものがあるであらう。我が向陵の健兒がこのことを深く自覺する時、そこに新たな決心と實踐とが生れて來なければならぬ。十二月八日以来寮生の氣持は大いに改まつて來たとはいへ、まだまだなまぬるい、だらしない、ぼやけて居る。これではだめである。

傳統は保存されねばならぬ。併し硬固して生命を失つた形でなく、生きて潑刺たる姿に於いてである。その爲には或る意味で傳統は常に破壊されなければならない。今や傳統の名に隠れて自己の偷安を貪ることは許されない。眞の一高生の誇の爲に、はかなき一高生のみえを破り去らねばならぬ。拘束を欲せざる者は自ら規律し得るものでなければならぬ。それをなし得ざるものは自ら拘束を要求するものである。一高中に餘りに小なる局部的精神と傳統とが固定し過ぎて、部分を生かすことによつて本當に全體を生かすといふ心懸が足りぬことはないか。部分の全體に於ける位置の自覺が足りぬことはないか。この氣持は又徒らに一高を國家や世界の氣勢から切り離して、無用に外からの刺戟や影響におびえたり、徒らに自分の特殊待遇を希望したり、自ら恃む所なくして他を冷評したり罵倒したりさせて居るのでは

ないだらうか。私は寮生の間からこの際深刻な自省と、この自省から泉み出た實行の生れて來ることを切に切に希望する。

過日寮生の一人が召に應じて寮を去るに臨んで言ひ遣した詞は、たのもしく私の耳底に残つて居る。彼がいつたのは、

「私のことは私に任せて安心してくれ。後に残る諸君の文化に對する仕事は、戦の仕事よりも更に困難である。しつかりやつてくれ。」

といふ意味であつた。諸君の多くも亦やがてこの一寮生片山の後を追ふであらうが、片山の残した詞にはまことに我々を感動させるものがある。

併し人間は殊に日本人は、前に敵がある戦争に於いて最も多く緊張する。さうして四隣に力強い文化國を有しない關係もあらう。文化や學問の仕事に於いては緊張と努力とを缺き易い。さうして文化や學問の嚴しさを忘れてそれを甘いものと思ひがちである。緒戦の勝利に酔つて「日本の科學や技術が、今や歐米を凌駕してゐるかの如く早合點し、歐米に學ぶべき何物もないかのやうに思ひあがる口吻に接する」(一月十三日、朝日新聞、學藝欄、藤原工業大學長谷村豊太郎氏の文章の一節)といふことは、如何ばかり憂ふべきことであるか。徒

らに外國語の學習を輕視せんとするの徒の如きも亦、この類に數ふべきものであらう。更に谷村氏のいふ所を聞かう。

「我が海軍用兵者側の將士が、多年に互る猛訓練の辛苦艱難に堪へ、その實戰に臨んでは勇猛果敢、如何に善戰善謀であつたかを、人一倍に會得し得る我身には〔筆者は海軍造兵中將である〕、米英の科學を輕侮するやうな不逞な心持が起るところか、まさに胸の痛むを覺え、思はず落涙するのを止め得ない。」

といふに至つては、我々も實に肅然として襟を正さざるを得ない。彼から學んだ、彼に感謝すべき器械と技術とを以て、彼を撃破せねばならぬ心術は、實に悲壯なものがあるであらう。

米英の暴戾に代つて東亞民族をしてその所を得せしめるといふ理想は、その言の如くに容易には行ひ難い。併し若しこれを行ひ得ずんば、東亞に内容的な新秩序は來らない。若し暴戾なる米英にすら我々の政治的、經濟的、文化的施設が及ばなかつたとしたならば、我々は何の顔があつて、太平洋の魚腹を肥やし、熱帯のジャングルに倒れた我々の同胞に對することが出來よう。

學徒の本務が心身の鍛錬と學問の研鑽とにあることは、戰時といへども變らない。ただ國

家の要請が國民としての諸君の義務履行を迫る爲、一時これを拋棄若しくは中止せしめることとあらば、諸君は喜んでこれに應じなければならぬ。近時時局の緊迫に従つて、國家が學生と教師とに課する註文も極めて多くなつた。併しこれを本校の實狀について見る時、その爲に奪はれる時間と勞力とよりは、奪はれたと思つた時間と勞力との方が遙かに大きくはないか。諸君は果して本當に奪はれるだけの勉強をして居るかどうか考へてもらひたい。私は國家危急の際に於いても、文化のこと、學問のこの一日も忽せにすべからざるを思ふのである。若し諸君の中本當に勉強を奪はれるやうな人があつたならば、奪はれる勉強の持合せの少ない諸君は、彼に代つて勞役に服するだけの親切と愛國心とを示してもらひたい。國家の危局に當つて、各々の人が各々の領域にあつて安んじて長處を發揮し得ないのも、時には已むを得ぬことではあるが、國家の現實と永遠との爲にも、それは出來るだけ避けられねばならない。諸君にして又國民にして、かかる人を守りかかる人に代るだけの熱情を示し得るならば、それは國家の施設の不備を補ふのみならず、又その施設の改善をも具現するに至るであらう。

國家の多事を忘れずして學問と文化との建設にいそしみ、非常時に處して靜かに平常心を

養ひ、緊張の裏に餘裕を存するの工夫は、至難中の至難であるが、これは諸君の大野心の標的たるには十分價するものがある。

記念祭の一日、諸君の歌聲の天に響き、朗笑の丘をゆるがすを希望しつつ、それが諸君の歌々たる實行と勉強とを促す力とならんことを祈る。(昭和十七年一月十九日)

新入生を迎ふ

先づ新鋭四百數十名の本科及び特設高等科生徒諸君を、この新向陵の地に迎へ得たことを喜びとする。諸君は随分我が一高に對する強いあこがれを持ち、多年の苦心と努力とによつて、今日の喜びをかち得たのであつて、諸君の胸中の感慨は實に察するに餘りある。同時に諸君は諸君に劣らぬ熱望をこの丘にかけて寄せ來つた幾千の青年が、空しくここに登る機會を逸したことを思ひ合せて、諸君の今日の幸福が、諸君自身の努力は固より、さういふ人達の犠牲によつて遂げられたことをも忘れず、諸君のこの恵まれた幸福を一層愛重して、おろそかに取扱はぬやうにして頂きたい。よく新たに結婚する夫婦に對して、結婚當夜の心持を忘れるなどいふことがいはれるが、私は新入生諸君に對しても同じ言をいひたい。諸君の今日の喜びも、諸君が漸く學校生活に馴れるに従つて、動もすれば新鮮味を失ひ、懶惰な日、

退屈な日、更には入學を悔いたり呪つたりする日が來ないとも限らない、さういふ誘惑や情性から諸君を救ふものは、恐らく諸君の今日の潑刺たる氣持を想起して、これを新たに發展させる外にはあるまい。諸君にとつて今日此頃の生活は實に大事な日である。

今から殆ど四十年前に、この私が一高にはひつた時にも、當時の校長狩野先生から、私共は天下の俊才といふ立派な詞を以て迎へられたのである。私共はその當時に於いて天下の俊才であつたかも知れないが、恐らく諸君も又今日に於ける天下の俊才に相違あるまい。併し入學試験の困難といふ網が、よく天下の俊才をすぐり得たとしても、俊才必ずしも萬能ではない。人間として要求せられる最も大切なことは、一定の試験に旨く合格することではない。日本と世界とにとつて諸君よりも有用な、傑出した人物が、今度の不合格者の中にあり、或は一高を志願せぬものの中にあり得べきは、固より言ふを要せぬことである。かかる無用の言を費すのは、諸君の天下の俊才たる矜持が正しく保たれ、諸君が淺はかな自惚や甘い自慰に陥らざらんことを願ふ餘りの婆心に過ぎない。

又他方から考へると、入學試験の結果から見て天下の俊才である諸君は、概して健康の優秀でない今の日本の青年の水準から見ても、遺憾ながらおしならして低位に居るのである。

この點は私が諸君と國家との爲に、最も憂慮する一大事である。諸君が俊才の誇に自ら媚びてこの一事を忘却せざらんことは、私の最も切なる願である。日本の置かれた文化や生活の錯雜や混亂が、殆ど結核時代といつてもよい位に青年の健康を蝕めることは、國家の政策によつて又社會生活の改善によつて矯正さるべきことは勿論であるが、併し諸君自身が國民の一人として、國の爲に銘々注意せねばならぬ喫緊事である。殊に諸君の年齢である二十歳前後は、生理的にも精神的にも轉機的な時期であり、一方に若い生命の活潑な發揮は、他方その裏に極めて傷き易い微妙なものを藏して居る。これは肉體精神の兩面に互つて、諸君の裏に生死の力が劇しく働いて居ることを示すのである。弱い者が強くなつたり、強い者が弱くなつたり、さうした變化も極めて多く、希望と共に沈衰の機會も繁く來るのである。この時に當つて諸君が聰明なる反省と周到なる注意とを加へるならば、虚弱なものが健康に、消極的なるものが積極的になる可能性も甚だ豊かなのである。弱い者も望みを失ふことなく、強い者もその健康を浪費しないことが切に願はれる。

我が一高は開校以來六十年餘、開寮以來五十年餘を閲し、その間幾多の先輩は國家社會の各方面に出でて、日本の國力や文化の進歩に貢獻して華々しい業績を擧げた。日本の現代史

から一高の先輩を除き去つたらば、それはかなり落莫たるものになるといつても過言でない。一高が天下の諸學校中、極めてポピュラーな誰人も知らざるなき存在である所以は、偏にかうした先輩諸君の御蔭である。併し諸君は單に先輩の遺した光榮に負かざるのみならず、新しい時代を擔ふものとして、更に先輩の遂げなかつた所を遂げ、先輩の見出し得なかつた理想を見出さなければならぬ。徒らに世に時めく存在となるばかりでなく、世の鹽となり、下積となり、國家と人類とに對して永遠の寄與をも擧げることが志さねばならぬ。

一高生に、一高の生活に、過去に於いても現在に於いても、勝れたよいもののあることは、私もこれを認める。併し世間と同じ弊風も同じ無反省も亦存在して居る。諸君は多年一高にあこがれた餘り、勝手に一高及び一高生を理想化して居た爲に、親しく現實の一高生や一高を以て、或は失望するかも知れない。否現在の一高が諸君の一から十までの満足を得るとするならば、私は却て諸君の理想の低きを悲しむであらう。併し諸君に告ぐべきことは、諸君がもはや一高生であり、單に一高の生活を與へられるものとして受け取るばかりでなく、諸君に課せられたるものとして造り創むべき責任を有するものなることである。諸君は諸君の先人や先輩の遺したものの、教へたものに對して、これを謙虚に受け容れ、その意義を尋ね、

更にこれを第三者として眺めるに止まらず、それを生活の上に實踐して體驗すべきことは勿論である。併し諸君はあくまで謙虚であると共に卑屈であつてはならない。諸君の持つ正當の要求に就いては、これを率直に發表し主張すべきである。所謂知識階級なるものが、この種の勇氣を缺く爲に、如何に厚顔無恥の主張を蔓らせ、不正義を世間に横行せしめて居るかは、諸君の疾くに知れる所である。比較的反省に富み正義に敏なる青年を集めた一高生の間にも、この點に於いて全然世間の流弊を脱し得たとはいへない。

諸君が新入生として先輩に従順であつて、好んで異を立てぬことは望ましいが、諸君の健康を保持し、諸君の人間を養ふ上の正しき要求に就いては、あくまでこれを堅持して譲らざる氣魄が欲しい。世間に善人は少なくない。併し彼等は多く弱き善人である。諸君は社會に出て強き善人となるの素を、今から作つて置かねばならぬ。さうしてこれはやがて諸君が一高生活を改善し、一高生活に新しき貢獻を爲す所以の道である。(昭和十六年天長節の夜)

記念祭を迎へて

學年短縮の爲に、三年生がこの九月に學校を出ることになり、三年といふ最終學年に記念祭といふ懐しい想出を残さず丘を去ることを遺憾とする心持が、六月の初に違例の記念祭を催すに至つた理由だと思ふ。この學年短縮が時局の影響によるものであり、向陵三年の生活が二年半になり、我國は世界歴史が始まつて以來最大の戦争に、國を擧げて参加して居り、一高生の大部分にも第一線に出て戦ふべき責務が目前に迫つて居る。今年の夏の記念祭こそ、當に「健兒無限の想ひ」あるべきであらう。かうした感慨が如何に今年の記念祭に發露するかを見たい。

併し記念祭はお祭である。お祭も時勢によつて違ふのは當然であるが、お祭である以上「お祭騒ぎ」の賑かさを避けなくてもよい。心ゆく限り一日のお祭を楽しく過ごしてもらひ

たい。たゞ折角のお祭に、全校生の氣ぐみが揃はないのでは困る。殊にお祭をしてもらふ三年生が、入學試験など明日のことを思ひ煩つて、このお祭に参加する意氣が乏しいやうなことで、今年に限つて違例の記念祭を催した趣旨にも副はぬことになる。何事にも一理窟をつける、殊にえらさうな理窟をつけるのが、この頃の流行であるが、岡の上の木も草も緑なる六月の一日を、五十餘年の歴史をしのんで、高く歌ひ、楽しく遊ぶのに、さう大した理窟は入らない。理窟は平生に言ふがよく、勉強はふだんにするがよい。大東亞戦争の終局も亦定め難い。大東亞新秩序の確立は更に長い仕事である。我々の苦難の道は遠い。我々に懈怠があり、弛緩があつてはならないが、祭の一日を若人の意氣高らかに歌ひ興することは、この懈怠を拂ひ、弛緩を引きしめる意味を持たぬとは言へない。記念祭に當つて切に千四百の一高生の健康と自重とを祈つて止まない。(昭和十七年五月二十六日)

青年と責任感

私はこの頃青年といふと、一番先に具體的に面前に浮んで来るのは、私の学校の生徒と同じやうな顔であります。今日も晝飯の時に、学校の寄宿舎で、十五六人の生徒と一緒に飯を食ひながら話をしましたが、まあその時のやうな氣持で、餘り固くならず、説教をするとか意見をするとかいふ氣持でなく、お話をしたいと思ひます。

そこで、青年に望むことといへば、先づ青年は青年らしくあれといふことは、誰も考へつくことであります。青年は大人や老人などと違つて、まだ世の中の辛酸も多く嘗めない。それだけに人間が練れてゐないといふところもあります。同時にまた世の中の汚れに染みない、また世の中を恐れない。それだから正しいことを正しいままに實行したいといふ理想を持つてゐる。つまり理想的なところがある。そこで青年は、先づ青年らしく純眞でありたい、

或は勇氣があつて欲しい。その態度は公明であつて、術策を弄するが如きことのないやうにしたい。青年にして既に世の中の經驗を誇る人のやうに、世の汚れに染みてゐるのを得意としたり、餘りに用心深くなり、またいぢけて思ひ切つたことが出来ないといふやうな人は、もう既に青年でありながら青年らしさを失つたものであります。つまり、青年に對して青年らしさが望まれるのは、人間本來のいぢけない、歪められない、汚されない姿を發揮してほしいといふことであります。

さういふ外に、私は特に今日の青年に望ましいこととお話したいと思ひます。だが、青年に望まれることは、素より人間一般に向つて望まれること以外のもではありません。即ちそれは同時に我々が我々自身に向つて望むことでもあり、決して諸君にばかり望んで我々が知らぬ顔をしてゐられることはありません。

そこで、私が考へますに、現代の日本にはいろいろの缺陷があるだらうが、その中で責任感の缺乏が、私には特に著しく感ぜられるのであります。私はこの現代日本に缺けたこの責任感を提げて、特にこれを青年諸君に向つて望みたいのです。

一體人間が他の動物と異なることはいろいろありませうけれども、その特異な點の中の最も

重要なものは、人間が道徳的存在であり道徳的動物であるといふことにありませう。それで道徳といふことはどういふものであるかと申しますと、いろいろ喧しい詮議を抜いて簡単にいへば、結局責任を感じるといふことになりませう。若しこの人間が、自然物と同じやうに、全く自然の法則といふものに支配せられて、自己の意識即ち自覚によつて行動を決定するといふ要素が皆無であれば、自分の責任を感じるといふこともなく、従つて善惡の判別などもなくなつてしまふ。例へばここに氣違ひといふものがあります。それがめちやくちやなことをする、或る時には人を殺すといふやうなことまでする。しかしながらその氣違ひには責任を問ふことが出来ない。その氣違ひは全く自然の法則に従つて支配されて居り、自分の意識によつて自分を支配することが出来ない。だから氣違ひは道徳的人間とはいへない。人間の人間たる所以は責任を負ふかどうかといふことにある。それを更に平たくいへば、恥を知るか知らないかといふことになります。更に、人間が道徳的に勝れてゐる人であるか、劣つた人であるかは、その人の責任を感じる程度が深いか浅いか恥を知る程度が深いか浅いか、それによつてきめられるといつてもいいと思ひます。

今日の時局が非常に重大な時局であるといふことは、何人も等しくこれを認めるところで

あります。日本國民が國民としての責任を感じて、さうしてその感じた責任を自分の實行に強く現はしてゆくといふことがなければ、到底今日の時局を突破してゆくことは出来ないのであります。

この頃、天皇に歸一するといふことがよくいはれてをりますが、それは結局、我々が天皇に對し奉つて、臣民として我々の總ての行動の責任を負ふに外ならないと信じます。國家の道徳的、情操的、政治的中心が皇室にあるといふ我が國柄から申して、それは同時に國民として國家に對してあらゆる行動の責任を負ひ、この責任感に基づいた行動を勵むといふことであり、皇室を國家の中心と仰ぎ奉ることによつてこそ責任感が、一層具體的人格的な、血も肉もあるものになるべきであると信じます。

臣道實踐といふことも、結局國民としての責任を、天皇に對して負ひ奉り、この責任感に基づいて行動することに外ならぬと思ひます。

私が子供の時に聞いた話ですが、伊藤博文公が首相の職を辞しようとした時に、明治天皇が、お前は辭職することが出来るが、朕は辭職することが出来ない、と仰せられたといふさうです。このことは、私の少年の心にも非常に強く刻みつけられたと見えて、今にも忘れら

れません。若し我々國民が、我々の行動といふものに對して、天皇と國家とに對して責任を負ふといふことを忘れたならば、天皇歸一といふことは、却てあらゆる國民の責任を天皇にお負はせ申すといふ、實に恐懼極りないことになります。ここに至つては、何の臣道實踐もあり得る餘地はありません。今日のやうな時局に於いて我々は、實に人間としての責任、具體的には國民としての責任を強く感ずるといふことの重大性を、深く思ふものであります。

我々は勿論、我々のなしたことに對して責任を感じなければなりません。しかしまた我々は更に進んで、我々の直接になさない行爲に對しても、全然責任を免れることが出来ないのであります。今後二十年間位——それは恐らく二十年くらゐではききましますまいが——は日本の國歩の最も困難な時代であります。しかも、その時局の重荷を負はされるものは、今の青年諸君であります。しかし諸君の負ふ時局は悉く諸君の行動によつて生じたもののみでなく、それが今日の我々がなしたところの行動によつて生じたものも、更に我々の先輩の行動によつて生じたものも、諸君を惱ます重荷となるのであります。即ち諸君が責任を負つて何とか處置すべき課題には、諸君に與へられてはゐるが、必しも諸君の作つたものでないものがある。さういふものを諸君は、前代若しくは現代から負つてゐる。これは人間が歴史的存在で

あり、社會的存在であつて、單なる個人的存在でないといふところから來てゐる。具體的にいへば、我々が國家の一員として、國民として、日本國といふ歴史的關聯の裏にあり、歴史と共に生死浮沈するものだといふ、さういふ約束によるものであつて、自分のやつたことではないからといつて、その責任を逃れることが出来ないものであります。我々が過去から傳へられたものは、これは或る程度動かすことが出来ない與へられたものでありますけれども、その與へられたものをどういふ風に處分するか、どういふ風に打開してゆくか、さういふことは矢張り我々の責任にあるのであります。

諸君は「ベルツの日記」といふ本をお讀みになつたことがあるかも知れませんが、ベルツといふ人は、明治初年から日本に來てをりまして、日本の醫學の進歩に貢献したのみならず、宮内省の侍醫としても功績のあつた人です。彼の日記を見ますと、その中に、日本が隨分小さなところの姿から、だんだん大きく成長して來たところの道行を、我々は具體的に窺ふことが出来るのであります。今の青年は、たいてい大正の中頃に生れた人々でありまして、この大正年代は隨分日本にとつて多事な時代でありました。しかし何といつても、日本が既に世界の日本として大きく覇を唱へてゐるところの日本、成長してゐた日本であります。

さういふ時代に生れた諸君は、往々にして日本が昔から大きいものであつたと、かういふ風
に考へがちになり、諸君を生んだ日本がそれまでに如何に苦勞して成長して來たかといふ
ことがわからない。さういふやうな諸君に對して、外國人としての公平の立場から、同情を
以て日本の成長を見守り、日本の歡びを歡び、日本の憂ひを憂へたこのベルツといふ人の、
私心なく書きつづけた日記は、さながら小さな日本の成長發達史であり、それを讀まれると、
我々が我々の先輩から歴史的に受けたものが、如何に大きいかが實感的にわかつて來ます。
しかし、我々はさういふ風な歴史的遺産をば、意識的に別にありがたいと思はないで享
受してゐることが多いのであります。例へば、明治の末邊から大正にかけて、日本の富が殖
えると同時に、今までになく西洋文化の享受も出來るやうになり、同時にいろいろの混亂も
起り、またいろいろの缺陷も現はれて來ました。その文化や富の増加などを與へてくれた先
輩に對しては、當時の青年は平氣でこれを享けて、別にありがたいと思つてゐなかつた。
ところが先輩が残してくれたものは、必しもいつも我々を喜ばせてくれるものばかりではな
く、それによつて我々が苦しまなければならぬものもある。また我々に大きな問題として解
決を課し、それをやらないと我々が先へ進めぬといふやうな場合もあります。

我々は、先人の残した惠澤に浴すると同時に、先人が我々に残した課題の解決をするとい
ふ道徳的責任を、歴史に繋がり同時に歴史を造る歴史的存在としての立場から、逃れること
は出來ない。さういふことを、我々は深く考へなければならぬと思ひます。

自分のしたことに對して自分が責を負はなければならぬといふことは、いふまでもないこ
とであります。しかし自分のしたことはどうにでも自分の勝手に始末出來るものかといへ
ば、決してさうではありません。例へば、自分が自動車走らせてゐる内に、自動車が崖
から落ちて、自分は幸に助つたけれども、自分の同乗者は死んだといふことは、それは自分
のしたことではあるけれども、自分のその行爲に對する責任を償ふことは、なかなか自分の
力で出來ることではない。しかしながら人間が道徳的存在である以上、その行爲に對する
自分の責任感、どうしてもこれを抹殺し去ることが出來ない。この場合に死んだ人を生か
すといふことは不可能であつても、その責任感に基づいて新たな行爲を生み出すには居
れないのである。この責任感による行動が即ち道徳的行爲であります。責任といふことも、
ただ物質的に考へますと、それを他人に負はせて平氣であるといふことも出來るのでありま
す。

例へば、或る特志家があつて、どうも學生の出入するところの飯屋の食物がまづくて高い。學生に一つうまくて安いものを食はせたいと思つて、飯屋を開いたとする。さうして安くてもうまいものを食せてやつた。その人は總ての學生が勘定を精確に拂ふものだと考へて、さういふ計算の下に、うまいものを割に安く食はした。ところが意外にも飯代を拂はないものが澤山出來た。さうして收支が償はなくなり、今までのやうな安い値段では維持出來ず、今までの倍にしなければ引合はなくなつたとする。これは拂はなかつた人が、自分の責任を果さず、正直に拂つた人に自分の拂はない分を負はせたといふことになる。さういふわけで物質的には、自分の責任を人に負はすといふことも出來るのであり、世の中にさういふことをして平氣で生きてゐる人間も澤山ある。しかし若し我々が、自分の食つたものはどうしても拂はなければならぬといふ、責任感を感じたならば、よし人がその人の分を支拂つて、高い値段を拂ふといふことになつても、その人の責任感はこれによつて他人に委譲することは出來ないのであります。

x

乃木大將が、西南戦争の時に聯隊長として聯隊旗を薩軍に奪はれた。また日露戦争の時に

旅順の包圍戰で幾萬人の部下を殺した。さういふ責任を感じて乃木大將は遂に壯烈な自刃をされたのであります。乃木大將の心持からいへば、その責任はこれを他人に負はすことが出來ない。若しこれを他人に負はすことが出來たならば、乃木大將は平氣で生きて居られたでせう。

さういふ風に、責任といふものは、物質的の方面では或はこれを他人に負はせ得る場合もありませんが、自分の責任感といふものは、これを他人に負はせ得ないのであります。これが我々道徳的存在の本質に觸れる根本的事實でありまして、つまり自分の良心、自分の責、悔が、あくまでも自分のものであつて、他人のものでないといふところに、道徳的人間の人間たる所以があるのであります。この間も近衛首相が議會で或る議員の質問に答へて、今度の事變に對して、上陛下の宸襟を惱まし奉り、十萬の同胞を失つたことは、これ全く自分だけの責任であつて、軍部の責任でもなく又他人の責任でもない、といはれました。これは總理大臣としての重責に對する責任感を示すものであると同時に、道徳的人間としての責任の表白とも解すべきだと思ひます。それなら、近衛首相がさういつたから、軍部には責任がなく、また國民全體にも責任がなく、近衛首相に責任を負はせて平氣でゐられるかといへば、